
天国と地獄と一人の男(仮)

ShiroBlack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国と地獄と一人の男（仮）

【Zコード】

N2949Y

【作者名】

ShiroBlack

【あらすじ】

「死にたい……」男の望みはそれだけだった。

この小説はほぼ間違いなくシリーズ化します。

その場合、本作は完全オリジナルですが、二作目以降は二次創作の作品になります。

どこまで続くかは分かりませんが、現段階での候補は一つあります。簡単なまとめをこの小説の最後か一作目の初めに載せますので、二次創作が読みたいと言う方は、この話を飛ばしていただいても結構です。

この小説は、二次創作の作品では簡単に済ませがちな「漫画やゲームの世界に行くまでの話」を、多少膨らませてみただけの内容であり、要するに「設定にストーリーをつけてみた」話です。作者の中でのメインはあくまでも一つ目以降の小説であり、この小説はそのプロローグに過ぎませんので、閑話なしの駆け足進行による可能性が高いです。

章タイトル「プロローグのプロローグ」も、そういう意味で付けました。

また、設定上小説の終わり方が中途半端になる可能性が非常に高いです。

これらの理由により、濃厚なオリジナル小説を望まれている方の一次にはお応えできません。

この小説には、主人公最強・ハーレム等の、所謂最低系要素が織り込まれています。

また、作者にとっては処女作でもありますので、文章が拙い・語彙が足りていらない等の不満を感じられることも多々あるか

と思います。

以上の事に納得していただいた方、残念ですが納得できないという方、どちらも第一話へとお進みください。

01・プロローグ（前書き）

一言でまとめると、「あるところに不幸っぽい男がいました」という話です。

男の生い立ちの説明回ですね。

01・プロローグ

カチッ……カチッ……。

静寂とした部屋に、マウスが音源のクリック音が響く。

「あー……自分もこんな風になれたらなあ。」

そこにあるベッドには、枕やらクッションやらが積み上げられ、それを背もたれにして時折一人の男が咳く。

「俺の“非日常”はどうですかー？」

【非日常】

日常的ではないこと。当たり前ではないこと。また、そのさま。

彼はひどく飽いていた。

……。

……。

普通の両親を持つ、普通の女と、多少裕福な家庭に生まれた、少しダメな男。

そんな男女が出会い、親しくなり、やがて女は子を孕んだ。

そうして彼らは結婚し、一人の赤子が生まれるのである。
彼らは何か特別なことをしたわけではなく、多くの人間と同じように、出会い、結ばれたのだ。

その時に生まれた赤子が、この物語の主人公である。

幼少期の彼は、比較的賢い子であった。

ある程度物の分別はつくし、他人の気持ちも、子供なりに察することができた。

本が好きだった彼は、寝る前に母が読み聞かせてくれるのを嬉しく思っていた。

彼は特に悲しい話、可哀相な話に心を動かされた。

優しい彼は、同じ本を何度も聞いても泣いていた。

ある日、通っている保育園で一人の子供が彼を故意に傷つけた。
それを知った保育士は「一人を呼び、彼に『相手の子供を殴り返せ』と言つたのである。

保育士の考えでは、『やつたらやり返される』と言うことを相手の子供に学ばせることができると、彼にも『強い心』を持つて欲しかった。

しかし彼にとつては、状況がどうであれ“人を殴る”と言つ行為が、

とても悪いことに思えたし、そうでなくとも、人を傷つけることは苦手だった。

そもそもやり返したいなどとは考えていなかつたし、傷つけられたことなど既にどうでもよかつた。

それを言われたから、許可されたからと言つて、やううとは思わなかつた。

故に彼は、断つたのである。

「殴つてみなさい」「やだ」

：このやり取りが何度も続いた後、遂に彼は泣き出してしまつた。そこで保育士は諦めたのだが、この一件で彼は、『優しそうな子』と親や保育士に認識されることとなつた。

成長するにつれこの出来事を彼は忘れていつたが、ある日母にこのことを聞き、思い出した。

しかし彼自身が思い返しても、この時の彼の行動は（自分の性格をよく把握していた故に）自分らしいと思えたし、また同時に誇らしいとも思えた。

彼が5歳になる年、弟が生まれることがわかつた。

その頃の彼は、よく父方の祖父母の家に預けられていて、父親は仕事に行き、母親は少しの仕事や遊びに出掛けていた。

母親が仕事をあまりしなかつたのは、「俺が稼ぐから働かなくていい」と夫に言われたからである。

それはともかく、その祖父母のことが彼は好きでも嫌いでもなかつた。

そもそも家族愛のような感情は、彼にはあまりなかつたのである。あえて言つならば、「赤の他人よりは好き」といったところだ。

弟が生まれて少しした頃から、両親の仲は段々と悪くなつていった。怒つた母が、父を力いっぱい引き摺る程度の暴力を振るつてはいるのを、彼は黙つて見ていた。

もちろんそれなりの理由はあつたが、子供の彼には、なぜそつなつたかはまだ分からなかつたし、成長した今でも、知らないままだ。ただ当時は、『父親が悪い』という程度は、分かつていたようである。

それでも彼は、そんな二人の姿を見るのは当然好ましく思つていなかつた。

父がそういう風に扱われることを、かわいそつだと思つたのだ。それに、食事中にやられると『ご飯がこぼれることや、怒鳴り声が煩いのも嫌だつた。

しかしほんと父と話さなかつた彼は、母親の方が好きだつた。だから母がやりたいようにやらせたかつたし、そもそも『うほほ』興味はなかつた。

ただ、その光景を見ていた彼は、なんとなく悲しい気持ちになつた。

彼が小学校へ上がり、弟も保育園へと通い始めた。

彼は相変わらず賢く、勉強などは簡単にできだし、運動の成績もよかつた。

文武両道に長けていたのだ。

家族や周りの大人たちは、既に彼に期待を寄せていた。

彼の家系は特に勉学に長けた人物が少なく、いわゆる職人が多かつた。

両親も高校卒業しているとは言え底辺レベルだつたし、『トンビが鷹を産んだ』などと、よく言われたものである。

人見知りをしがちだつた彼だが、保育園の時の知り合いもいたし、

他の子供たちとはそれなりに馴染むことができた。

とは言え、彼は気付いてはいなかつたが常に周りに線を引いていたし、本当の意味での友人は一人もいなかつた。

だから放課後にみんなで遊ぶようなことは少なかつたし、彼もまたそれを当然だと思っていた。

もちろん遊ぶ時は友人として接していたし、みんなとの仲は悪くはなかつた。

四年生になつた頃、彼はようやく自分と他の者達との違いに気付きました。

そして、友達が欲しいと思うよつになつた。

それからの彼は以前よりみんなと遊ぶよつになり、“クラスメイト”ではなく“友人”と思えるよつな人間も何人かできたと思つた。ただ、何かが違う気がしていた。

五年生になり、彼はまた周りに疑問を持つよつになつた。

と言うのも、友人だと思っていた人間に、裏切られることが多くなつてきたからである。

いわゆる“いじめ”にはならなかつたが、なぜか彼には友人などできていなかつた。

昨日裏切つた人間が、今日は友達のよつに接してくる…ということもよくあつた。

そして相変わらず優しすぎた彼は、それを受け入れ、また裏切られる…そんなことの繰り返しが、続いていた。

しかし彼はそのこと自体では、それほど悲しくはならなかつた。むしろ、そういったことをしてしまつクラスメイト達の心を思つて悲しんでいた。

家庭では両親の仲が以前よりも悪くなり、夫婦の会話というものは段々となくなつていった。

が、なぜかそのタイミングで、（もちろん母は同意していたが）父の憧れていた一軒家を買った。

そして、弟の友人の家族がよく家に遊びにくるようになつた。そこで彼は、“自分の両親の不仲は普通の事ではない”と再認識したが、結局そこに特別な感情は抱かなかつた。

しかし彼は、そこで抱くべき感情について知つていたし、そういう一般的な反応ができない自分が、ひどく悲しく思えた。

自分の感情が希薄なのではないか、と思い出したのも、この頃である。

中学へ入つても、彼は相変わらず優秀だつた。

勉強の方は、塾などに通わなくて（一学年三百人弱程度の）学校では一番の成績だつたし、スポーツだつてできた。

彼は人間の感情について理解していたし、自分を妬む輩が必ず出てくると思つたが、特に自重はしなかつた。

周りの人間の期待などに興味はなかつたし、妬みにも興味はなかつた。

… そして、何事もなく一年が過ぎていつた。

二年生になり、自分の感情の希薄さを思い悩んだ彼は、“何かに熱中してみたい”と思つようになつた。

基本的に何でもできる彼は、自分にとつてあまり起伏のない人生をつまらなく感じていた。

そして彼は、次第に“非日常”を望むようになつていくのである。しかし、実は“起伏がない”というのは彼の思い違いで、“伏”はしっかりとあつた。

この時点では、度重なる友人の裏切りや両親の不和、それに自分の性格や感情についての悩みなどだが、そういうもののストレスは徐々に彼の心を蝕んでいった。

ところで彼は、自分の優秀さについてはもちろん理解していたし、それを鼻にかけたりはしなかつたが、同時に一人の力の限界も感じていた。

ネットやテレビや自分の眼を通して見る、この国や社会、世界などといったものの理不尽さが、彼には我慢できなかつた。

しかし彼にとつては問題が大き過ぎ、多過ぎた。

彼が出したのは“仲間と一緒にやる”といった、正解と言える解答だつたが、あいにくこの時点の彼は他人を信用はしても、信頼はできなかつた。

自分がそうなつた原因を考えると、それは今までの人間関係だと思えた。

彼は本当に一切悪くなかったし、そのことを彼も分かっていた。中学に入つてからも、なぜか人がくつついたり離れたりしていくことは認識していた彼だつたが、同時にもう手遅れのようにも感じた。結局、彼に新たな悩みが増えて、この問題は終わつたし、ある意味では続していくこととなつた。

一年生の半ばまでくると、彼は生徒会長になつていた。

これは、誰も立候補者がいないことを予想した教師陣が、それを当時の学級委員から出すことにし、委員会の会議で彼を推薦したところ、彼以外の委員たちも彼を推し始め、結局彼がそれを断れなかつたことによるものだつた。

簡単に言つと“生贊”である。

教師たちは眞面目で優秀な人間にやつて欲しかつたし、生徒たちは

やりたくなかった。

どちらも彼の性格をそれなりに知っていたし、断れないであろうことを予想して行った結果である。

彼は相変わらず、どうでもいいと感じていたが、そうなった以上はしっかりとやることにした。

スピーチなどの原稿は（入学式での挨拶等のそれなりな大舞台ですら）丸暗記して、みんなの顔を見ながら話せるようにしたし、その他の活動も真面目にこなしていくのだった。

この件で目立つ立場になったことから、彼の予想していた“他人からの妬み”が表に出てくるようになった。

学年を問わず、幾人かの生徒たちから嫌がらせをされるようになつたのである。

しかし“いじめ”と言つほどではなかつたし、その行為自体は嫌だつたが、彼にとつては数ある悩みのうちの一つに過ぎなかつた。

彼は独りだつたが、今更その程度で折れる人間ではないと自分を認識していたことで、ある程度心を強く持つことができたのである。よつて彼はこれを放置し、時が経つにつれて自然となくなつていつた。

ただ、“眞面目な人間がクズによつて被害を受ける”という理不尽さは、彼の心を疊らせたままだつたが。

三年生になり、ある事件が起きた。

彼には中学でそれなりに仲の良かつた女の子がいたのだが、彼女の恋人が「彼女と話すのをやめる」としつこく迫つてきたのだ。

正直彼はそれでも別によかつたし、くだらない問題に巻き込まれたくはなかつた。

しかし、彼女は違つた。

そのような状況になる前から、彼女は恋人の独占欲の強さに悩んでいて、そういうつた問題を彼に相談していたのだ。

そのことからも分かるように、彼女は彼をそれなりに気に入っていたし、故に恋人の主張は受け入れられなかつた。

それでも彼女は恋人に愛されているという状況をやめたくはなかつたし、結局不完全燃焼なままこの問題は続いていくこととなつた。それが後に更なる事件を引き起こすのであつたが、それは後述することにする。

そうして様々な悩みを抱えたまま中学を卒業していくのだが、彼にとつてはほぼ悪いことしかなかつた中学時代にも、幾分のいいことはあつた。

彼はクラスメイトに勉強をよく教えていたのだが、これはそのことからくるものだ。

ほとんどの人間は“それが当然だ”とでも思つていたのか、感謝の言葉一つなかつたのだが、彼もそれについてはどうでもよくなつていた。

そうして卒業に差し掛かった時、教えていた一人が“彼のおかげで今の僕がある”と言つていたのを人伝に聞くことができて、それを聞いた時彼は非常に嬉しくなつたのだった。

同時に今まで何とも思わなかつた、“感謝すらしない他の人間”に若干の怒りが湧いたのはご愛嬌である。

さて、いよいよ高校生になつた彼だが、新学期早々問題が起きた。

例の“独占欲が強い男”の友人が、男とタイムマンで勝負をしろと持ちかけてきたのである。

彼は“俺に「彼女と話すな」と言つなら、彼女に「俺と話すな」と言えればいい”と思っていたし、それを彼女の恋人にいつたこともあつたが、結局無駄だつたようだ。

…しかし、正直卒業したら彼女との接点もなくなるんだから、もう時期的にも滅茶苦茶である。

ただその男の友人とやらが、今までに何度も彼を裏切った人間だということが気になった。

「大方、俺が伸されることを期待して、嗾けてきたんだろうな…。」

それが、彼の見解だつた。

そして相手方の勢いのまま、断り切れなかつた彼は喧嘩をすることとなつてしまつた。

結論から言うと、彼は余裕で勝つた。

初めて殴り合いなんてものをしたが、彼には勝てるだけの能力があつた。

故に、順当に、彼は勝つたのだつた。

しかし、得るものは何一つなかつた。

強いて言つなら、『喧嘩をした経験』だけである。

高校に入つても、彼は相変わらず、燃えなかつた。

家庭の方も酷くなつていて、両親は家庭内別居状態だつた。

実は彼が中学三年生の時に、父親が2年程働いていなかつたことが判明した。

給料は借金をして持つてきていたようだつた。

そのことが分かつてからも、父はほとんど働かなかつた。

むしろ、特に彼の財布から金を抜き取るようになつていて。

父の仕業だと予想した彼が聞くと、悪びれもせずに「そうだ」と答えた。

しかしそれすら、彼にとつてはどうでもよかつた。

彼は父の事を可哀相だと思つていたし、金に頼着しない人間でもあつた。

そして、父の代わりに母が働くよくなつた。

彼も高校に入り、バイトを始めた。

学校に限らずどこの世界でも、先輩面した人間は彼にとつて鬱陶しかつたが、これは本当にどこも同じことだと思うことにして、精力的に働いた。

家の住民税やらなんやらを、彼の稼いだお金で支払った。ある日、父方の祖父母が家へ来た。父を働かせる為だった。彼が、手にした金を家のために使っていることを知った祖父母は、それが当たり前のことのように何も言わなかつた。

この時彼は違和感を覚えた。

何故なら彼にとつて、“子供が親を助ける”のは当たり前の事ではなかつたからだ。

そうするのは、“相手に恩を感じている者だけでよい”と言つ認識だつた。

彼の中では、親は産んだ責任があるが、子供は親に対して何の責任も負つていはないはずだつた。

この世界に自分を生み落した両親や、それを産んだ祖父母、さらこそ先祖までもを、彼は恨みたかつた。

一時期彼は、何のために自分が生きているのか分からなかつた。最終的に彼が出した結論は、“念の為”であつた。

正直に言つて彼はもう死にたかつた　と言つより消えたかつたが、

「もしかしたら、数秒後にいきなり目の前に5億円ほど積まれてるかも知れない」

「もしかしたら、明日日が覚めたら魔法が使えるようになつてるかも知れない」

などと考え、生きていた。

要するに、現実的にはまずあり得ないような希望に縋つて、ある意味非常にポジティブに生きていたのである。

しかし、彼には自分にあつた“ストレスの発散”の方法が分からず、

様々な要因によって齎されるソレは、彼の心に大量に蓄積していた。
そしてここへきて、彼の心はようやく折れたのだった。

高校一年の夏、彼は学校を辞めた。

仕事は続けたものの、それからの彼は非日常を求めて、自堕落な
生活を送っていくのであった。

01・プロローグ（後書き）

長つたらしくて済みません。

ずっと呪められていたとか、親に捨てられたとか、そういうたまりにもありがちな話にはしたくなかったのと、プロット上の理由とでこうなってしました。

シリアス的な話は好きではないので、今後はほととぎ出しない予定です。

シン と、静まり返った夜道に、一人の足音が響く。

道を歩くは齢22の男。

身の丈は190cm程で、外に用も興味もないからと、仕事以外は半ば引き籠もりのような生活が続いているといふのに、"なんとなくそうした方がいい気がする"と言つて、トレーニングを欠かさぬこの男は、無駄にいい体格をしている。

それはさておき、今宵は週に一度の散歩の日である。

時折立ち止まつては、何かを探すようにあたりを見渡しているこの男。

傍から見れば幾分奇怪な光景だが、幸い今は深夜。男の行動に疑念を抱く者はいない。

この散歩は四年ほど前から続いていて、男にとつてはそれなりに大切な時間のようだ。

Side 男

こんばんは、死にたがりです。

私は現在、“奇跡の機会”を探していたします。

家にいるだけでは起こりづらいと思つたからです。

時間を深夜にしているのは、人通りも少ないので多少不審な行動をしても問題ないからです。

それに、普通に歩いている姿でさえ、他人に見られるのは嫌ですし。もう一つ理由があります。

それは、仮に“奇跡”が何者かの力によつて意図的に起こるのだとしたら、それを起こす者はできる限り多数の人間には見られたくない

いのではないか…と思つたからです。

ちなみに今の私にとつての奇跡とは主に、

一つ、とにかく現世から離れたいので、なんらかの方法でこちらの意図とは関係なく致死量のダメージを受けることなどの“負の奇跡”。

二つ、異世界の人間との邂逅や、魔法やらの異能に目覚めたり、超大金が手に入つたりと言つた、“正の奇跡”（起こつた結果が正良いこと に繋がるとは限らないが、“起つた”といつて と 自体が私にとつては良いことである）。

の二つがあり、前者の“意図せず”の理由は、二つの起つる可能性：即ち“現世でもある程度幸せになれる可能性”を、未だに捨て切れていいからです。

つまり望ましいのは、“道を歩いていたら奇跡的にトラックが突っ込んできて死んだ”であつて、“トラックに突っ込んでいつたら奇跡的に死ねた”なんてことは、現時点ではよろしくない…と言つことです。

しかし、やはり奇跡なんてものがそう簡単に起つるはずもなく、またそれを承知で探しているのにも関わらず、未だに家が近づいてくると気分が落ち込んできたりします。

通り魔でもいかと思つては、背後を確認し嘆息。

次元跳躍した誰かが現れないものかと思つては、周囲を見渡し嘆息。隕石でも落ちてこないかと思つては、夜空を見上げて嘆息。…あ、これで流れ星を見つけたことがありますよ。もちろん願い事は叶いませんでしたが。

「生きてこる間に奇跡の光が我が身に降り注ぐことなど、果たしてあるのだろうか。」

答えが返ってくるはずもないのに、私はまた呟いてしまいます。幾度となく繰り返したその問い掛けは、果てなき夜の闇へと吸い込まれていくように、私には感じられました

Side out

結局、何も起らることなく今日の散歩は終わった。

風呂に入り、自分の部屋へと入った男は、いつものようにパソコンをつけ、ゲームをしたりウェブ小説を読んだりしながら、一日を終える。

こうして彼にとつてのつまらない人生は、淡々と消化されていくのだった。

数か月後。

ある山にて

美しい自然が一望できる山頂を求めて、そこには毎年たくさんの登山者が訪れていた。

しかし15年程前に木々が大量に伐採されて以来、山肌は露出して人気も少なくなっている。

その山の中でも、ひと際高いところにある崖の上に、男は立っている。

「ふう…ようやくここまできたか。

しかし、この荒れ果てた山の持つ風情が分からんとは、みな見る目がないな。

綺麗だった時は腐るほど集まっていたのに、そちらの都合で勝手に汚した後は誰も寄り付かん。自然は可哀相だな。

…不倫とか似てるような…。」

「…自然が強いのか人間が強いのか分からなくなるな。

確かに災害に抗うことなどできていないが、こうして自然を蹂躪している証拠を見れば、そう思うのも道理だろう。

自然相手には弱肉強食、人間相手には弱者を守れ…か。

まあ人間も自然の一部だと考えれば、どうでもよくなるな。」

暫しの間その場で殺風景な山を眺めていた男だったが、徐にその足を前へと動かした。

「ふむ、この一歩¹とに命が削れていく感覚は、何とも言えん愉悦を齎してくれる。」

数日前。

Side 男

ああ…つまらん。

相変わらずの変わり映えしない日々、このこれからもこんな毎日が続いていくのかと思うと、本当にうんざりするなア。

ネットで幸せとか売つとらんもんかねー。ないよねー。

うーん、奇跡を求めるようになつてからもう何年になるかねえ。

最初はとにかく死にたかったんだよな。

それで段々といい意味での奇跡を望むようになつて…ここ一年くらいは転生（記憶をなくして新たな体で人生再スタート）でもいいかな、とか思うようになつたんだわ。

記憶なしの現世行きとかつてのは、もつこれ以上この世界に自分を送りたくないから却下だけだ。

もしかしたら、記憶をなくしても、本人の根本的な考え方　心の奥底にあるモノ　みたいなのは、変わらないかもしけないから、それを考えると“次の自分”が可哀相で仕方ないの。

だつてこんなクソみたいな世界にまた生まれるんだよ？

しかもこの考えが正しかつたら、もう既に“今の自分”に至るまでに、この体は何度も同じような思いをしてるってことでしょう？

もういい加減、解放してあげたい。解放してもらいたい。

そう、思つてます。

：それで、記憶なしだとしても、いわゆる異世界に転生するのならいいかなと。

記憶ありで体も維持される異世界行きつてのがベストなんだけどね、望み過ぎかな、と…最悪この世界ほど自分にとって理不尽じやなけれどいいか、と思つことにしたわけ。

まあその前に地獄を経由しなければならぬ氣もするけども。

しかし…内容の良し悪しに関わらず、何かしらの“きっかけ”が自分の幸せの道への懸け橋となるものだと思つて、待ち続けていたが、中々そんな機会には恵まれなかつた。

まあ、最初はそれほど期待はしていなかつたけど。

神がいたとしても、そんな簡単には干渉しないだろうしね。

その後は願いが強くなつたことにより、奇跡などあくまで偶然によるものだと思いつつ、少しでも確率を上げるため散歩に出掛けたりもするようになつた。

結局今の今まで何も起こらなかつたがな。

「ああ…悲しいなあ…」

：私は自分が社会不適合者であったと、確信を持つて言える。

自らの求めるものが得られぬ世界でなど、生きることに何の意味があつつか。

とにかく今はもう、生きていたくない。

「うん… そうだな、常世に行こう。逝つてしまおう、いい加減に。」

恐らくは現世で最大の幸せを…感じることができることだろうな。
この世に生まれ落ちたその瞬間からの決定事項を、今こそ実行しよう。

もう待つては居れん。

こちらから掴みに行つてやる。

待つていろ、未だ見ぬ我が幸福よ

Side out

舞台は山へと戻る。

「ふははははは…今…この瞬間こそが…我が人生に於ける至福の時

ぞー！

やはりここにあつたか、我が幸福よーいや、初めからここしかなかつたのだな…！」

落ちる

「くうーつー感じるぞ、風を！大氣を！我が生命の最期にして最高の輝きを！

これこそが私の求めたものよー楽しすぎるなこれは…ククク。」

墮ちる

「叶うのなら、件の転生のよつになるか、もつ次の人生などは存在せぬよう願いたいな…。」

胸の内に、現世で想い続け、結局叶わなかつた望みを抱えながら、
男は墜ちていつた

Side ???

「次……右へ。次……右。」

「ふむう……今日はヤケに数が少ないのう。」

「次……ん?なるほどのう……辛かつたな、右へ。」

彼女のよつな子に、何もしてやれんのが悔しいの。つ。
儂にできるのは、精々が来世を幸せに過ごしてくれる」とを祈ることのみじや。

「次……。次……。」

Side out

Side 男

「んつ……。iji...は...? 知らない天井...すらないな。」

目を開けると、真っ暗な星のない夜空のよつな、現世で俺が想像した自身の未来のよつなともかく、視界一面には黒色が広がっていた。

そのままでは埒が明かないので起き上がつてみると、足元も暗い、周囲も暗い。

自分が何かの上に立つている感触は感じられないが、確かに“直立した状態である”ことは認識できた。

今の自分は魂魄のような状態なのか、或いは一時的に感覚が麻痺しているだけなのか。

それはさておき、なるほど…これが「あの世」ねえ。

現世の記憶を確認してみると、自分が“無事に”地面に叩きつけられ、最初に頭蓋骨が砕け散り、次は脳漿がぶちまけられるだろうと、いつところまで、恐らくは身体が潰れたであろう瞬間の直前…までは思い出せた。

まあなんにせよ、死んだことは確かだろうな。

フフ…フフフフ…やつたぞ…遂に俺はやつたのだ！

イカンな、思い出すとまた興奮してきたよ…ククク。

未だ覚め遣らぬ興奮を抑えつつ、身体の状態を確認してみると、僅かだが感覚が戻つてきていることが分かつた。

辺りをよく見ると、いくつかの青白い塊が見えた。恐らくは魂とうやつだらう。

何故そんな風に見えるのだろうか。自分の体以外は、そう見えるようなシステムなのだろうか。それとも俺が特殊な状態なのだろうか。

アレ、に意識はあるのだろうか。話せるのだろうか。

そこまで考えて、ふと、自分はどうなのか声を出して確認してみようとしたが、そういうふうにこへ来た時に声を発していたな…と、その必要がなかつたことを思い出した。

が、

「せつからく喋ることができるても、相手がいないんじゃ意味ないよなあ…」

結局声が漏れ出てしまつたことに苦笑しつつ前方に田をやつたところ…

「……。……。」

距離の関係で聞き取れないが何か言つてゐる、田算で4メートルほどはありそうなでつかいおっさんと、その脇にそびえ立つ二つの大きな（おっさんよりも大きい）門が見えた

03・牛頭馬頭兄弟登場！

「突然ですがみなさん、僕は今、墜ちています。」

落ちていく男を放つて、時は若干遡る

Side 男

遠くにおっさんと扉を確認すると、後は容易に予測できた。
なるほど、あれは閻魔だろう。そしてあっちは、天地それぞれの国
へ通じる門だらう…どちらがどっちかは知らんがな。
もしかしたら、地獄と現世かも知れないな。

あそこに向かつた靈魂は、閻魔の裁定によつて振り分けられるのだ
るべ。

現世行きだけは勘弁だ。

そこまで考えて、ふいに自分もそこに行かねばならなうことを感じた。

変な脇道へそれたりする「」ことがないよつこ、精神に直接干渉でもしているのかね。

「ま、他に当てもないし行つてみますか。」

……。

しばらく進むと、やはつといふかなんといふか、川が見えてきた。

「これが彼の有名な三途の川ね。

しかも「」丁寧に賽の河原までりやがらア。」

河原を見ると、通行の邪魔だからなのか子供たちはいないものの、鬼らしき者達が徘徊しているのが確認できた。

別段用はないため、今は他の魂魄と共に舟へと乗り込み、川を渡つた。

「さうに歩いて田標の場所に近づいてくると、おつせんの手元にはノートのよつなものがあるのが見えた。

なるほど、あれが音に聞く閻魔の台帳ですか。」

恐らくは死因や、罪の内容などが書かれているのでしょうか。そして判断が微妙なものは、多分隣に置いてある水晶のよつなもので、過去を覗くなりして確認するのでしょうか。

果たして私はどちらへ向かうことになるのか…。

罪を犯したことなどありませんが、『親より早く死ぬのは悪いことだ』などと、言われることもあるよつですし、どうなるか分かりませんね。

「それより、自分の番まではまだ時間がありますしね。暇だなア。」

「

といふえずすることもないのと、ボーッとしたりホゲーっとしたりしつつ、順番がまわってくるのを待つてみると、よつやくあと一人のところまできたぼげ。

家族以外の者と話すのは久しぶりだな…。

「次イ。」

Side たぶん闇魔

「次イ。」

「むへー」いつ、身体の適応力が尋常じやあないの。もつ五感がハツキリしとるよつじやわい。

「うわー。えりあらん~」

「儂はHンマじや。坊主の國なら話へりこは聞こたじがあるじやるつ。」

「やねり闇王か。主食は?」

「酒のシマリじやな。さて、坊主の行先じやが……ん~血ひ令を経
ち、親ぢにひか祖父や祖母よりも先に逝つてあるな。」

近頃は安易に死んでしまつ者が後を絶たんな。
いつこつ輩には何かしらの罰を下さると決めておる。

「うん。飽きたからね。」

「なんとも軽率な…。坊主のよつな奴があると、先ほどの病弱な女お
子なのような人間が不憫で仕方ないのう。」

「こいつ命を粗末にするクズ共は、重い罰を受けりゃあいいんじや。」

「ああ、なるほどね。可哀相だよね、そつこいつおも。」

「…坊主は地獄行きじや。喜べ、期間は通常の1-0倍の1-000年
にしてやつたぞ。左の門へ進め。」

「やつかイ。んじやな、おっさん。」

Side out

エンマと別れて門へ向かうと、門番つぱいのがおりました。
話しかけた途端に、門の中へ放り込まれたと思つたら、実際は門の
中の穴の中へ放り込まれっていました。

Side 男

それからほんとうに随分と長い時間落ち続けています。
10年くらい経ったんじゃないでしょうか。

現世ではなかなか味わえない「落卜」の感覚ですが、これだけ長い
といい加減飽きてきて、死んだ時のように気分が高揚することもな
く、退屈な日々を過ごしています。

恐らくこのつまらない日々も、刑罰の一つなんでしょうね。
ともかく、現世行きを免れたのは良かつたです。

こここの世界へ来てからとまつもの、空腹や睡魔に襲われる」とはあ
りませんでした。

まあそんなことだらうとは思っていましたけどね。
しかし五感は機能してくるため、痛みなどは感じじる」とはじょ
ちなみに戸へなくとも、寝る」とはできました。

落ちている間にこれからのことを考えた結果、更に自身を鍛えるこ
とを決めました。

と言つよつ、今のように地獄行きの状況になる」とも、一応予測し
てはいたんですね。

結局のところ、こうなつた僕の道は一つです。

このまま“あの世”に居続けるか、記憶を残したまま現世とは別の
世界へ転生する。

通常（記憶が消えるタイプ）の転生をするのはやっぽりダメですね。せっかく地獄に行くんだから、その経験を忘れないでおきたいです。そして重要なのは、来世の自分を苦しめないこと。

前にも言つたような気がしますが、真新になつて元の世界へ転生しても、僕の“根源”の部分が変わらなかつた場合は悲しい思いをするのが目に見えています。

そこで、どちらを選ぶにしても鍛えておいた方が何かと得だと思い、それを決めました。

死んだと思ったら目の前に神が現れ一発強化…のよつた夢が広がる展開がなかつたのは残念ですが、永遠とも思える時間があるんですから、自分で強くなつてしまいましょう。

一度も助けてくれなかつた神に、今更縋りつとは思いませんしね。

そう決めはしたものの、落下している状態の今、体を鍛える手段がイマイチ思い浮かびませんでした。

そこでとりあえず落ちている間は、精神統一でもして内面の強化に努めることにしましたとさ。

.....。

「ひやつふう。わたしは いま かぜに なっている。」

棒読みじゃ いまいちノリませんね。

さて、あれからさらに長い時が経り、ようやく底が見えできました。ここまですると、トカラ変なにおいが漂つてきたりします。

「…あれ? これこのまま叩きつけられるの?

うわあ…前に来た人の“中身”が残つてて、自分のと混ざつたりしたらやだなあ。」

…掃除してあることを祈りつつ、着地に備えて、だらだらしてみると、地面が近づいてきました。

現世では知ることのできなかつた脳が潰れる瞬間も、この体なら味わえるはずです。

アドレナリンも今回は謙虚になつていて、しつかりと痛みも感じられそうですね。

さて、そろそろのようですね。

ここで“死ぬほど”的痛み”に慣れておへとしまじょつか。
知識欲が疼きますねエ…。

そんなことを考へていて、
やがて地面が眼前に迫り、
僕はグシリと音を立てながら、
落ちてきた水滴が飛散するかのように
体の至る所をぶちまけた。

……。

「ふう…痛かった。」

本当に痛かった。

いつの間にか体は元通りになつていたものの、落下の衝撃からくる
痛みは残つていたんだよ。

戻つた瞬間に激痛が走つて、また死ぬんじやないかとさえ思つたも
の。少しだけね。

まあ、一応地面が綺麗だったのには安心したが。

ん？誰かが近づいてきたようだ。

「「我らは牛頭馬頭兄弟である！」」

「うん。」

牛人間と馬人間。見たまんまだな。

「俺は獄卒長をやつてる、阿坊つづーモンだ。
某の名は吽坊。^{うんばつ}副長でござる。」

「ふウん…あ、こんにちは。」

「本来なら罪人一人の為に俺達が来ることはないんだが、何分人手不足でな。」

地獄も不景氣なのかね。

沙汰は金で解決できるのかしら。

挨拶も碌に返せないほどストレスが溜まつていてみた。

「大変だね。頑張つてちょ。」

「ありがとうよ。でも俺たちが頑張ると、その分罪人であるお前たちが辛い思いすることになるんだぜ？

何をしたのかは知らんが、手前は1000年もここにいなきやいけ

ねえみたいじゃねえか。」

「まあなんでもここよ。」

心身を鍛えるのよ。もつてこないでしょ。

「…やうか。じゃあたつぱつしゃるから、自分の罪を悔い改めるんだなー。」

れど、いぢりも頑張りますか。

「…なるほど、殺生のみね。」

吽坊から渡された書類を見て、阿坊が言ひ。

「それならお前はハ大地獄の内の一つ、「等活地獄」に行くことになるな。」

【等活地獄】

想地獄の別名を持つ。徒に生き物の命を断つものがこの地獄に墮ち、アリ・蚊などの小虫を殺した者も、懺悔しなければ必ずこの地獄に墮ちると言われている。また、生前争いが好きだった者や、反乱で死んだ者もここに落ちるといわれている。

この中の罪人は互いに害心を抱き、自らの身に備わった鉄の爪や刀剣などで殺しあうといつ。そうでない者も獄卒に身体を切り裂かれ、粉碎され、死ぬが、涼風が吹いて、また自然と元の身体に生き返る、という責め苦が繰り返される。ただし、この「死亡しても肉体が再生して苦しみが続く」現象は他のハ大地獄や小地獄でも見られる。

「 そつか。それで、内容は？」

「 どうやら自殺のようだし、『 勝手氣ままに殺生をした』 つてことで『 極苦処』 にするか。」

地獄は主に八つの階層に分かれており、これをまとめて八大地獄・八熱地獄などと呼ばれている。

さらに、それぞれの周囲には「十六小地獄」と呼ばれる小規模の地獄があり、地獄に落ちた亡者の中でもそれ設定された細かい条件（生前の悪事）に合致した者が苦しみを受ける。

その内容は、犯した罪や大地獄の階層によつてさまざまで、今回の極苦処もそのうちの一つである。

「 うーん、まあいいか。行こうぜ。」

「 ククク… そう急かすなよ、すぐに着くぞ。」

「 早く行こうよオーパパアー！」

「 誰がパパだつー！」

「 兄者… いつの間に子供なんて…。」

.....。

「着いたか。」

「ここにきた人間は、あらゆる場所で常に鉄火に焼かれ、獄卒に生き返らされて断崖絶壁に突き落とされることになつていて、担当はあそこにてゐる……なんとかつて言う獄卒だ。」

「名前知らんのかい。」

「いいじゃねえか、所詮モブだろ？」

それじゃ、俺たちは行くからな。」

「人手不足なんだから、数少ない獄卒の名前くらい憶えておいてやれよ……。

まあお疲れさん、案内ありがと。ばいばいパパ。」

こうして、1000年に渡る、地獄での生活が始まった

「だからパパじゃねえつーーー！」

…始まつた。

Side 男

阿坊達と別れた俺は、とりあえず担当獄卒の元へと向かった。

そこかしこから、肉の焼け焦げる臭いが漂つてくる。
見たこともない物体に囲まれているのは、恐らく高熱をもつた鉄だ
ろう。

その中心には大きな穴が開いており、その場から逃げようとした人
間が、円形の囲いの上に立っている幾人かの獄卒に捕まつては、穴
へと投げ込まれている。

「おーい、なんとかやーん。阿坊に言われてきたよー。」

「…罪人か。俺はここに管理を任せられている、「やあやああああ
だ。

もう聞いていいと思つが、ここは十六小地獄が一つ、極苦処である。

「

あ、また一人投げられた。

その時の叫び声せいで、この獄卒の名前は聞き取れなかつたが、まあ知らないでも困らんだり。

「えーと…じゃあしおりへよひしほ願こします、なんとかさん。」

「俺の名は「もひやめてくれええええ…」だと書かれてるだり。

「んー、なんか周りの喧騒が煩くて聞こえないっス。それに、名前なんか別に知りたくないっス。」

「貴様いい気になりおつて…！」

よからう、貴様はこの俺が直々に投げ込んでくれるわッ！」

なんか鬱陶しいおつさんだなあ。

「おつ、なんとかさんのなんとか投げが久しづりに見れるだ。」

「ホントかよ！あれで投げられると、すぐえ勢いで飛んでいくからな、初めて見たときは興奮したぜ。」

「なんとかさん…はやく見せてくださこよーー。」

「じ、じに…部下にまで名前を呼んでもらえないのか…！
なんて不憫なんだ…笑いを堪えきれん…。

「ぐつ…ええい貴様ら黙つとれーお前も笑うんじゃない！

さつわと飛んでけー秘技、「ウワアアアア…」投げー…「

なんとかさんは、さつまつて（何と言ったのかは聞き取れていなかつた）俺の体を鷲掴みにして、投げた。

「フフフ…ここへきた人間は、その耐え難い苦痛により大抵は三日で精神が折れる。

せいぜい惨めな姿を見せてくれよ?」

そう呟いたおっさんの声は、もう随分と離れた俺には届かなかつた。

なんとか氏に投げられた俺は、彼の部下たちの言つた通りもの凄いスピードで、自分が穴の底へと向かっていることが分かつた。このままだと俺の体はまた、着地とともに潰れてしまうだろう。まあどうせ元通りになるから、どうでもいいんだが。そんなことより今は…。

「樂シイイイイイイー…！」

そつ、楽しいのだ。

崖から落ちた時も、奈落　エンマのいた冥界と地獄とを繋ぐ穴を落ちた時も、これほどのスピードは出ていなかつた。

例えばジノット「一スター」がそうであるように、『速い』と『この』の
は楽しいのだ。

いやあ、死んでよかつた！
グチャリ

「…復活…」

こんな簡単に復活できるなんて、便利な体だな。
まあ痛いけどね。

「つか…熱くね？」

辺りを見回すと、その原因が分かつた。
上と同じく、この穴の内部も熱い鉄でできているのだ。

穴の側面は平らではなく、登れるようにでっぱり（もちろんこれも
鉄製だ）がついていて、ここから逃れたい亡者共が必死に登つてい
るのが見える。

しかし大抵は熱さに耐えきれずに手を離してしまい、穴の底へと落
ちては潰れている。
出口へと辿り着いた者も、上にいる獄卒によつて再びここへ投げ込
まれているようだ。

「なるほど…終わりの見えない苦痛によつて、みな精神を壊されて
いくわけか。」

地獄の基本はそつなのだろう。

その苦痛の度合とは、階層によつて様々だが。

「まあとりあえずは、この熱に慣れないとな‥。」

そつ、こゝは等活地獄。

私の知識が正しければ、こゝで受けける苦痛は地獄の中でも比較的緩いもののはずだ。

ならば、この程度で挫けるわけにはいかないだろつ。

「ほかの奴らのように、逃げよつとしたらダメだな。
心頭滅却でもするか。」

どうせ逃れられないなら、受け入れればいいのだ。

火はお友達だよおーの精神で、頑張ろつ。

幸い、落ちてきた時に精神統一の鍛練は積んでいるし、まあなんとかなるだろつ。

彼は知らない

ここへ落ちてきて、彼のように心から冷静なままであつた人間など、今までほとんどいなかつたことを。

大抵の人間は落ちてくるまでの間に発狂するし、そうでない者も地獄へ着いた瞬間に自らの命運を悟り、（当然獄卒達に簡単に取り押さえられるが）暴れまわるのが普通だ。

小地獄を見た時に、挫けてしまつ者もいる。

しかし、奈落で孤独と闘いながら何十年も鍛練された彼の精神は、最早常人のそれとは全く別の物になつていたのだった。

そもそも、生前から普通の精神はしていなかつたが。

良くも悪くも、彼の精神は簡単に冷静さを“失える”ほど弱くはなかつたし、強くもなかつた。

彼は自分が他と違うことに苦惱したし、喜びもした。

話が逸れたが、死んでようやく光が見え始めた…というのも、彼が

頑張れる一つの要因かもしだい。

ある意味夢が叶つたし、叶いかけてもいるのだ。

とは言え、彼はまだ長い道のりを歩き始めたばかり。

頑張れ、男！負けるな、男！

誰も知らない
なんとかさんの名前を。

05・不審（前書き）

あまり面白くないです。

地獄には、
今日も悲鳴が響く。

Side 阿坊

۹۷

泣く子も黙る牛頭馬頭兄弟の元、阿坂だ！
今は弟と一緒に、地獄の見回りをしている。

「いやー」の悲鳴を聞こへると、仕事したむつにならぬよな

「そうで」ござるな、兄者。

しかし仕事に精を出すのもいいが、そのやる気を家事の方にも少しは回してくれると、ありがたいのだが。

「ま、まあ善処するよ……いつもありがとうな、吽坊。」

弟には俺のサポート役として、色々と助けてもらっている。
言つてなかつたが、俺達にも家はあるんだぜ？

一応獄卒鬼の中ではトップにいるから、それなりにいい家に住んで
いるつもりだ。

「うむ…。ヒルギ兄者、昨日また極苦処の担当者が愚痴を言つて
いたぞ。」

「ああ、あの…えつと…なんとかつて奴か。」

「あいつ、こつもひるせえんだよなあ。

「やうだ。内容は相変わらず、自分のヒルギで罰を受けている罪人
のことだ」
「うわ、内容は相変わらず、自分のヒルギで罰を受けている罪人
のことだ」ということだ。

なんでも、そいつにヒルギ極苦処程度は、罰になつていないとか
なんとかつてことだしこ。だからヒルギで勝手に場所を変えることなどはできない
けどな。
生前犯した罪によつて決まるものなんだから。
しかし…。

「うーん、いい加減見に行つてやるか。」

そう言つて、俺達は極苦処へと歩を進めた

……。

極苦処へ着いた俺達が見たものは、亡者達が鉄の上で焼かれる姿や、穴の中へと投げ込まれる様子。

呻き声や叫び声がそこかしこから聞こえており、まさに『これぞ地獄!』と言つたところだ。

しかしその中に一箇所だけ、妙な空氣の場所があった。

「そんじや、もつ一本。」

「ぐぬぬ……いい加減二つちが疲れてきたわい。」

「だらしねええな、それでも鬼かよ。」

「」

「」

俺達が見たのは、男が鬼と一対一で格闘している姿だった。

沈黙が続く中、静寂を破ったのは俺。

「…いや、なにあれ。」

こんな言葉しか出でこなかつた自分が恨めしいつー。

「なるほど、あれでは確かに、愚痴りたくなるで」やれるなあ…。

「ありえないでしょ、何なのあいつ。」

「あれは確か、80年程前に此處へ来た者で」やれるな。

地獄へ来たのに妙に落ち着いていたので、よく覚えておる。」

「…あー、鬼の俺達に向かつて、『頑張つて』とかぬかした野郎か。

」

そういうや居たなあ、そんな変な奴が。

刑が始まれば、すぐに泣き喫くようになるだらつと思つていたが…。

「どうしてこいつなった…。いや、ホントに…。」

奴は俺達鬼でさえ、多少の熱さを感じる鉄火の上で、涼しい顔をして立つてゐる。

逆に相手の鬼の方は、戦つた疲れもあってか、苦しそうだ。思わず頭を抱えてしまつ俺…。

「…ありやあただの人間じやねえな。」

「某も同感で、」
「一度閻魔大王のところへ赴くべきかと。」

「だな。 やつと決まりやあやつをと行へん。」

職員通用口からなら、一瞬で上まで行けるしな。

「承知。」

Side out

Side HINMA

「HINMAさん！」
「ちやー。」

儂がいつものように仕事をしていると、牛頭馬頭兄弟が訪ねてきあ
つた。

「…………なるほどのひ。あの坊主は確かに、他とは違う雰囲気じやつた。

冥界（ハングがいるところ）へ来てすぐには、体の方も適応してたしのひ。」

定期連絡の日でもないのに、ちらへ来るのは珍しいなと思ひ、どうしたのか尋ねると、返ってきたのはあの時の坊主に関することじやつた。

130年前に、体の馴染みが早い男がきたのを、憶えておる。

「あこひひこて詳しいことを教えてくれ。1000年分もの罪を犯すような、悪人にも見えなかつたしな。」

そういうやつ達は、基本的に簡易書類しか見ないんじやつたのう。

詳しいことか……あれ？ 儂もほどんじ知らひのひ。

「期間にこてはアレジや、元々はただの自殺で100年じやつたんじやが、態度が気に食わなくて10倍にしたわ。」

「…………またかよ！ 裁定を下す奴が、そりやつて自分の感情に流れやがつて！」

「閻魔大王のせいで、彼の面倒をあと20年も見なければならぬので、わるいのか……」

その間ずっと、なんとかさんの愚痴を聞かなければならぬこと思つと、悲しくなつてくるで、わるなあ……。」

「つーかあれがずっとあそこには居たら、極苦処の奴ら辞めちやうよ。人手不足なんだよ! どうしてくれんのよ!」

「落ち着けお前達。」

「あんたのせいだよ!」「あなたのせいです!」

「いや……うむ。とりあえず、実は儂もあの坊主のことはよく知らんから、水晶で過去を覗いてみよう。」

「完全に主觀のみで刑期10倍にしたのかよ……。まあいい、やつをと覗くぞ。」

「承知。」

一応儂の方が偉いんじゃけど、分かつとるんじゃろ? つか……。

儂が念じると、水晶にはあの坊主の過去が浮かび上がり、儂らがそれを覗きこむと、映像が頭に流れ込んできた

.....。

「生まれた時は普通の奴だな。家もまあ……何の変哲もない普通の家

族に見える。」

「弟が生まれた時あたりから、両親の仲が悪くなり、後に家庭内別居状態か。何一つしてくれない父親にも、身内で唯一優しく接してくれるのう。」

「どの方面に対しても、潜在能力がかなり高いようだ」
「じやるな。興味を惹かれるものがないようで、ほとんど活用できていませんが…。」

「友人だと思つていた者が、影では敵対者。さらに別の者によつて、一方的に悪者にされる…。そういうことがあつても、彼自身は積極的に他人を助けているようじやがな。」

「友人や家族にすら“都合のいい便利屋のよつな存在”として、いよいよに使われてきたようじやな。能力の高さと、底抜けに優しい性格につけ込まれたんじやのう。」

「その性格についても彼は理解していたようで、小さい頃から悩み続けていたようですな。なぜ自分を責めるのか…彼の所為ではないと言つのに…。」

「段々と感情も希薄になつてしまつたようじやのう。本来は纖細で優しく、真面目な人間だったようじや。」

「プライドが高く、頭もいいため他人の意見を必要としない傾向にあり、全てを一人で背負い込んでしまう性格のようだが、この状況ではそれも仕方ないと言えるな。」

「環境や周りの人間のみならず、単純に諸々の運にも恵まれてあり

ませんね。そういう状況が続いて、生きる間に嫌気がさしてしまつたのでござるつか。」

「笑顔も殆どなくなつてしまつた。他人と関わることを避けるようになつてしまつたのう。」

「愛情や友情と共に、ありえないと思いつつも、『非常』にも憧れのようなものを抱いているな。」

「いやつは日常、いやつは日常に映る世界は、理不尽と苦惱で溢れておる。ずっとそんな日常から解放されたいと願つていたようじゃのう。」

「そして欲しかつた理解者は結局現れず、孤独を抱えたまま、限界が来て自害に至つた、か……。」

「なんと悲しい子じゃ……」
「

「泣くなよ……つかこんな奴がなんで地獄に居るの……。」

「それは、軽率な大王の所為でござるな。」

「ようやく不運な人生を終えたと思つたり、今度は地獄に1000年だもんな。幸薄すぎ。」

「だつて、所謂“不幸な人間”のような感じじゃなかつたんじゃもん。」

そういう者は、一目見れば分かる。

悪い意味で、オーラが違うからね。

彼奴はむしろ、幸せそうじゃつた……が、今になつて考えてみると、死ねたことが嬉しかつたんじゃうつむく……。

「『もん』じゃねえよ。可愛くねえぞ。……まあ確かに、そんな素振りは見せてなかつたけどな……。」

「彼が今いるのは、徒に殺生を行つた者が行く場所にござる。しかし殺生どころか、むしろできるだけ虫や動物などの命を、助けるようとしていたみたいでござるな。」

「しかもその匙加減が上手いんだよな。」

「まあその時も、助けられない命を見ても、悲しんでいたようじゃがな……。」

「… なあ Hンマセで、 ここつ、 何とかならんかねえ。」

「… いれでも儂は眞界のHじゅ、 それなりの権限は持つとる。人ひとりの裁定を“ なかつたこと” にするくらいには可能じゅわい。」

「マジか…? じゃあわいつとあこつんと行けりばせー。」

「やつ急かすな、 すぐ行くわ。」

「こや、 アンタは一番急ぐべきだぬ…。」

「 もの通りで、 ジギン。」

「……。」

ゆうやく馬の足前が出来た。

【極苦処】

S.i.d.e 男

じく来てから八年、相変わらず、鍛練の日々です。

「おーい、其処な坊主。」

まづは熱を受け入れるところから始め、只管無心になつてみたり、
熱と対話しようとしてみたり… 25年かけて、ようやく平氣になりました。

何も感じなくなつたわけではなく、自分と熱が一体になつたような
感覚ですかね。

熱は感じるんですが、私の体を焼けたとしないんですよ。
そのお陰で、穴を登つたりするのも容易にできるようになりました。
もう熱は、私のお友達です！

「…聞こえないのか？おーい…」

次にやつたのは、獄卒鬼に投げられる」と、自分の体を打たれ強
くすることですね。

登つては投げられ、登つては投げられ…繰り返すこと15年、今では“なんとかさんの全力のなんとか投げ”を、こちらが完全に無防備な状態で喰らつても、痛くも痒くもありませんちめんたる。いやあ、死なない体つて便利ですねえ。

無茶な鍛え方でも体が壊れないんですから！

「あれ、あいつこいつ見でね？こら小僧、返事せんかい！」

何かさつきから煩いですね…。

その次が、“私を投げよつと近づいてくる獄卒さん達との、戦闘行為”です。

さすがは鬼でしたね、どいつもこいつも戦闘能力が半端じゃないです。

ただ投げられるだけだつた前の鍛練とは違い、相手も明確な意思を持つて攻撃してくるので、痛かったです。

「鈍器のようなもの」で殴られると、当たつた部位が文字通り吹き飛びました。

そこでは、回避能力を重点に鍛えました。

結果的には8年弱で、1対5程度なら完璧に避けられるようになりました。

更にその過程での副産物として、殴られ続けた体は、いくら殴られても痛くないし吹き飛ばない、強靭な肉体へと変わってくれました。そしてようやく、攻撃能力を鍛え始めることができたんですが…。今までの48年間、来る日も来る日も穴を登り続け、打たれ続け、避け続けた結果、体全体の筋力が相当高くなっていることが分かつたんです。

鬼が、ただのパンチ一発で悶絶するんですよん。

とはい、技術の方はまだまだでしたからね。初めのうちは、なか

なか思つよつに攻撃が決まりませんでした。

そこで、回避強化で培つた動体視力を使ってみたり、理想の型を追及していつた結果……30年後には1対10でも完勝できるようになります！

攻撃の流れなどを体に馴染ませるのに、一番時間を使いましたね。この時点でとりあえずここには用がなくなりましたが、他に行く当てもないので、そこから現在に至るまでは、毎日獄卒達と喧嘩しながら過ぐしていました。

「あの……君……」

今までの出来事を振り返つてみると、突然モブ獄卒が話しかけてきました。

「何ですか？」

「あの三人が、さつきから君の事呼んでるよ。」

えつ……あれ俺のこと呼んでたの？

でもまあ……無視しようかなあ……面倒だし。

「おーーー聞こえてんだろーーーのーー無視すんなコホーーー！」

「兄者、落ち着いて……。大王も、無視されたからって落ち込まないで下をこ。正直気持ち悪いでじれる。」

うわあ……うわあ……。

4m超えのおっさんのがいじけてるのって、なんかこう……田にくるな……。

！兄者！？」

なんかきた。

こいつは確か阿坊だな… メンドくせえ。
とりあえず殴つとくか。

「返事しろって、言ひてんのふざらッテー！」

フハハハハハ！

この私の前では、獄卒長も形無しだな！

「あれ、俺の事呼んでたの？」

（ええH～ツ！？）

「いや……お前、気づいてただろ……。」

「もちろん。で、用件は？」

「ああー…まあとりあえず別の場所で話そづ。」

「おつに。」

さて、何の話なのかね…。

Side 坊

無事（？）件の男と合流できた某ひが、兄者と某の住んでる家で、彼に事の詳細を説明してこねでござる。

「（魔法の言葉、かくかくしかじか）で、（まねまねひのひのひ）なわけじや。」

本当に便利な言葉でござるなー。

「…なるほどね。それで、どうあるべきなの？」

「儂の権限で、坊主を地獄から出してやるうかと思つてて。こんなことで、坊主への贖罪になるとも思えんが…。」

そうだ。彼には本当に済まないことをしてしまつた。（主に閻魔が）今まで気付けなかつた某らも、少なからず罪に加担して、いたようなものでござる！（閻魔は“よつなもの”ではないけど）

「んー…やだ。」

：！？

「何つ！？何故じゃ！？」

地獄に残りたい理由などあるので、じゅうつか。
某達が見てきたのは、やめてくれと懇願する者や、狂つてしまい人
語を話せなくなつたような者ばかり。
彼のような者は初めてだ。

「いやア、まだ一箇所しか行つてないからね。
まだまだ使える“アトラクション”ありそудだし、ここで鍛えて色々
身に着けたいんだよ。」

なるほど、それであのよひな　なんとかさんが愚痴りたくなるよ
うな　状況になつて居たので、」やれるか。
それについて、地獄を遊技施設扱いとは…。

「やうか…しかしこのままでは儂の気持ちが収まらん。何かできる
ことはないかの？…？」

「つーか、地獄に落とされたことは、氣にしてないよ。
自殺の時点で覚悟してたし、期間のことだつて別にどうでも。怒る
とかそういうの、よく分からぬいから。
まあそれでも何かしたいつて言つなら、どうでも自由に出入りでき
る、「フリーパス」みたいなのが欲しいな。色々回りたいし。」

「…」の者の感情こま、まだ現世での影響が残つてゐるみたいで、じゅ
るな。
「この子をこんな風にした奴らを睨い殺してやつたいの？」

そんなことをしても、彼は喜ばんだろうが。

それよりも、多少歪みつつも、優しい人間のままでいたこの者の芯の強さを、某も見習わなくては。

「相分かつた。各階層間を一瞬で移動できる、職員通用口も使えるようにしておいた。」

「俺達の家も使っていいぜ。拠点みたいなのがないと不便だな。」

「ありがとせん。合鍵頂戴ね。」

「彼女かつ！」

「では僕は一旦バスを作りに戻る。出来上がったらこの家に届けさせよう。」

「じゃあ僕は、地獄のマップでも作るか。」

「兄者が進んで頭脳派らしきことをするとは……。」

「この者になつてやりたくなつたのかのう。まあ某も同じようなものでござるが。」

惹きつけられるような、不思議な魅力を持つてゐるよつて感じじる。

「いひぬせえよ。お前も手伝え。」

「承知。」

「ああそつじや、バスに名前書くから、坊主の名前を教えてくれい。」

「

「んー……神代 龍哉だ。」

「神代 龍哉じゃな……。よし、了解じゃ。他にも何か困ったことがあつたら、遠慮なく言つてくれ。」

儂は大抵冥界にいるからなの。坊主と最初に会つた場所じゃ。……それでは、また、の。」

「ああ、またな。」「じやあなー。」「また。」

さて、某らも取り掛かるとするで、いざやうか。

振り仮名がないと読めないようなのは嫌なので、厨一臭がしつつも現実的な名前にしておきました。

設定上の理由というのもあり、一応龍哉くんもそれは承知してくれています。

名乗る時に若干の間があったのは、自分でも厨一っぽいと思つているからです。

「フリー・パス、ゲットだぜ！－！」

地獄に似つかわしくない、閑静な住宅街。

ここには獄卒鬼たちの住居がまとめて建つていて。

その中でもひと際大きな、白ベースの一軒家で叫ぶのは、この物語の主人公である、神代龍哉その人。

御年おんとし152歳。

「うつせえ！こつちはまだ作業中なんだから黙つてろ。」

反応したのは、人手不足とは言えそれでも結構な数のいる獄卒鬼を、

獄卒長として取り纏める阿坊。

双子の弟である吽坊と共に、地獄巡りをする龍哉の為、地図を作っている最中だ。

ちなみに現在1192歳である。

「はやくしてえ。暇だよお父ちゃん。」

特にやることがなくて暇な龍哉は、先ほどから何やらこなすこと作業をしている。

「誰が父ちゃんじゃ！こんなに似てない親子見たことないわ！」

阿坊は牛頭の鬼、龍哉は人頭の人である。

「あ、うん、阿坊君うるさいよ。もうその話終わつたから。お前が反応する直前に、俺が飽きて終わつたから。」

… そんなことよつさあ、人に振り仮名つて振れるのかなあ。」

「どうしたのでいざるか？ 蔽から棒に。」

作業場を部屋の隅に移した阿坊に代わり、吽坊が答える。

「いや、名前のようにバカつて書く」とつてあんじやん？『木下が呼
んでるよ。』みたいなさ。

そんでさ、現実でもそれをやつてみんの。

人の頭の上に、「バカ」つて書いてある紙を乗せたりしてさ。」

「なるほど。」

「…うん。と言つことで、なんと今日は協力者をお呼びしました！
みなさんご存知、阿坊ちやんでーす！！」

タツヤはアホウをショウウカンした！
しかし あらわれなかつた。

「あほつ
「あほつ せえー！」

タツヤはアホウをショウウカンした！

「うるせえー！」

アホウがあらわれた。

「兄者… その、頭に… ルビが…。」

よく見ると、先ほどの龍哉の話のよう、阿坊の頭には「あほつ

と書いてある紙が、二つの間に貼られていた。一つの間につけたのだろうか。

「あん？…………おこ龍哉、なんだ「あほつ」ってー俺は「あほつ」だア！」

「いや……何が俺もよく分からんのだが、濁点が夢の世界へ飛んで行つてしまつたんだよ。だからやつ呼ぶしかなかつたんだ、すまんな。」

「意味が分からんわ！大体夢の世界つてビリだよー。」

「やつやあお前…心の中や。」

若干遠い田をしながら、語る龍哉。

「「心」と書つ漢字があるだらう？

恐らくお前は、右の点一つを置き忘れてしまつたんだ。そつ、若かりしあの頃へ…。

そしてバランスを失つたまま何百年も経過したお前の心は、もう崩壊寸前だつたんだ。

だからそれを補うために、「あほつ」の「ほ」が持つてゐる濁点が急遽そつちへ行くことになつたつてわけや…。

よかつたな吽坊！お前の兄者は奇跡的に助かつたようだぞ…」

「ううう…本当に良かつたで」やれるよ兄者…一某は…某はもうこつ兄者が壊れてしまつた…」

「吽坊…心配かけたな…。」

抱き合つ一人の背後には、地獄なのに夕日が見える。
その時龍哉は…

「ああ「レ…やりすぎたか?つか何故か呪坊の方がいつの間にか壊
れてたな…。」

少し後悔。

数日後

「さて、ビニへ行こうかネ。」

あれから、うやうやしい兄弟愛を見せつゝも彼らが完成させてくれた
地獄案内マップを手に、現在のところ当てもなく地獄を歩いている
龍哉。

「ン?これは…。」

龍哉が目にはしたのは、同じ階層にある刀輪廻じゅりんじゅの項である。

「刀か…担当者も使えるのかナ…。」

「どうやら「刀」の文字に惹かれた様子。

「素手での格闘は、とりあえず獄卒相手に圧勝できるまでになつたシナ。

次は武器でも使ってみようか。

防御面も、今まで喰らつてきた鈍器とは違つた鍛え方ができそうダシ。

「よし、ここに決めたヨ。」

そう言つて、龍哉は刀輪処へと向かうのであつた。

【刀輪処】

刀を使って殺生をした者が落ちる。10由旬の鉄の壁に囲まれており、地上からは猛火、天井から熱鉄の雨が亡者を襲う。また、樹木から刀の生えた刀林処があり、両刃の剣が雨のように降り注ぐ。人間界の火など、この世界の火に比べたら雪のように冷たい。

龍哉の目の前には、火に追われ、逃げ惑い、刀に切られ、火に焼かれる亡者達…と言つた光景が広がつていて。

「うん、なるほどネ。おーい、そこの獄卒君。僕もちょっとこの中に混ぜて貰えるかな?」

「あ？ 何だお前は。」

「ああ、何でもいいんだけどね、こうこうのを持つてるわけヨ。」

そつ置いて、懐から自身の名前の入ったパスを取り出す龍哉。

「それは… 分かった。自由に入り出していいぞ。だがそういう物を持つている奴は、普通地獄から抜け出す筈なんだがな。」

「まあ修行のためだヨ。ここでは肉体も精神も鍛えられるみたいだからネ。

精神力の強さに比例して、肉体が強くなっているように感じるだけかも知れンが。

どっちにしろ、死ながら鍛えられるってのはかなり美味しいナ。というわけで、ここには刀剣の修業をしにきたヨ。

君は使えるかネ？ ある程度までいたら相手をして欲しいのダガ。」

「なるほどな… いいだろ、相手をしてやる。

お前の期待通り俺は剣技を学んでいる。ここに担当になるには必須項目だからな。

ちなみに肉体に関しては前者が正解だ。本当に鍛えられている。」

「もう力、感謝するヨ。それじゃ、また会おうネ。」

そつして龍哉は、刀輪廻内部へと歩を進めて行くのであった

フフフフフ…なるほどな、やはり刀剣は違う。鬼の力で殴られてもビクともしない俺の体が、簡単に傷ついていくよ。

おまけに炎まであるし。

だが、こんなことで俺を止められると思つなよ…？
こんなモノ、すぐに克服してやる。

さて…極苦処と同じように、初めは炎に慣れるところから始めるかな。
その後は回避・防御能力だ。俺の体はまだまだ伸ばせる余地がある。
鉄の棍棒を防げると言つても、俺の筋肉には隙間がある。
恐らく、薄い刃物によつてその隙間をこじ開けるように傷がついて
いくんだろう。

だつたら隙間をなくすまでだな。
目指せ、全身鋼人間！…いつそダイヤまでいくか？

三十年後

「よつ、バトルしようぜ。」

ここへ来てからじょじょりの時が経り、ようやく例の獄卒と文字通り
勝負できるといつまできた。

「やつときたか。一体何年待たせるんだと思っていたぞ。」

「まあそつ言うなよ。地獄が相手だと中々骨が折れるんだ。」

「当然だろう。罪人が罰を受ける場所なんだからな。さて、俺は西洋剣でいいうかな。」

そつ言つて奴は数ある刀剣群の中から、長剣を抜き取つた。ちなみに今回俺が持つてるのは、ただの脇差である。

「んじゃ、始めつか。」

正直俺は刀なんて使つたことがなかつた。
そりやあそうだ、現代に生きていた人間なら、ある方が珍しいだろう。

刀輪處の中で適当に武器を拾つて使ってみたりもしたが、やはり対人とそうでないとでは、勝手が全然違うだろう。
なんせ相手は意思のある生物なのだ。

「…。」

そこまで考えて俺は、とりあえずありふれた袈裟斬りを放つことにした。
と言つたか、放つた。

「太刀筋がよろしくないな。」

しかし、結果は予想通り獄卒鬼には当たらず、風切り音だけが虚しく鳴つた。
…やっぱり空振りつて恥ずかしいね。

「次はこちから行くぞ。ハツ！」

「くつ…うん、いい感じだ。」

その剣の描く軌跡は、鬼の体には似合わず、洗練された美しさを持つていた。

：さすがに疾い。さすがに鋭い。

大分鍛えたつもりだつたが、避けきれず、防ぎきれずとはな…だが、これでいい。

こいつを乗り越えれば、俺はさらに強くなる。

つーか中で体鍛えておいてよかつたよ。

防ぎきれなかつたとは言え、それほど深くは傷ついてないからね。

「（なんだ）イツの体は…俺の刃がほとんど通らないだと…。）
ふむ…獄卒奥義が一つ、『獄炎』。」

奴がそう言つと、剣身に炎が宿つた。

流石は刀輪処担当だな、火の扱いはお手の物つてか。
ま、それは効かんがな。

「炎は既に、お友達ッ！」

「フンッ！」

：あれ？ちょっと熱いな。

氣とか魔法とかそういうタイプなんかな。

そんで使用者が込める氣の量によつて、熱さが変わるとか。

でもこつちだつて、“それに比べれば人間界の炎など雪の如し”とかつて言われる地獄の炎を克服してゐんですけど。
周りの炎の影響か？

地獄にいるから簡単にそこの炎を纏えて、尚且つ自分の氣・魔力量分の火力をプラスできるみたいな。

……よく分からんな。

よく分からんけど、超えて見せよ。

……。

「ふむ……刀の扱いはまだまだだが、それ以外はかなり高い次元にきてるな。俺の攻撃がほとんど通用せんとは。」

今回は様子見と言つことで、とりあえず数十分やりあつたといひで仕合を終えた。

「まあ努力しますから。

でも剣よりも鋭利な刀を使えば、もっと傷をつけられるハズだよ。

君達クラスの斬撃は、まだ無効化できないからね。

……じゃあこんな感じで、これからはしばらく相手して頂戴。

「分かつた。太刀捌きとか教えようか?」

「いや、血口流でやりたいからいらない。気遣いありがとう。」

俺は相変わらず、モノを教わるのが嫌いみたいだな。

「分かつた。じゃあまたな。」

「うん、またねん。」

彼と別れた俺は、更なる研鑽を積むために、再び刀輪廻へと足を進めた

「 それで、どうするんだ? 」

Side 龍哉

極苦処には80年程いた私だが、刀輪廻攻略にかかつた時間は60年ほどだつた。

と言つのも、やはり極苦処での経験が活きたようで、それぞれの段階を思つたよりも省略できたからだ。

それでも、初めて扱う武器の技術を鬼に勝てるまでに昇華させるのには、時間がかかつたが。

その後も各地を回りつつ「刀」を鍛えていたが、ある時、自分がいたハ大地獄は、正確にはハ熱地獄と言い、その隣にハ寒地獄なるものが存在しているらしいことを知つた。

すごい熱いのとすごい寒いのと言つ、まるで正反対のように見える地獄が隣り合つていて、「近所付き合いとか大丈夫なんだろうかと思つたが、呉坊が言つにはほとんど問題はないらしい。

ただそうなつたのもここ600年くらいの話で、それ以前は小さいざこざが頻発していたようだ。

最終的に大きな争いが起きなかつたのは、当時のエンマが二つをまとめ上げ、以降は牛頭馬頭兄弟が行き来しながら管理しているからだそうだ。

三人ともしつかり働いていたんだなあ……。

：話が逸れたが、そのハ寒地獄には私も惹かれた。

何故なら私は、熱には強いが寒さには弱かつたからだ。

そこで、ちょうど半分まできていた刑期の、残り500年を丸々そちらで過ごすことにして結果、寒さにもかなりの耐性を付けることができたのだが…。

ある日、地獄の技？獄卒流？みたいな、よく分かんないけど刀輪処の担当者が『獄卒奥義が一つ、獄炎』とか言いながら使っていたようなやつを、対戦したほとんどの獄卒達が使っていることに気が付いた。

若干羨ましくなつて阿坊にそれを言つたら、『知らん。』とだけ返され、非常に落ち込んだ。振り仮名のことを根に持つてゐるのだろうか。

みんなだけそういうの使つててずるい　：　そう思つた私は、結局自らの力でそれらの技を盗もうと努力したのだが、やはり“氣”の類の使い方が分からず（と言つより人間に使えるのかも分からぬ。氣の存在も分からぬ。）結局“どんな技だったか”だけを覚えて終わつてしまつた。

そう…終わつてしまつたのだ、刑期の1000年が、こうなると、少し寂しくなる。

私は、地獄での生活をそれなりに楽しんでいた。

やつていたことと言えば鍛練だけだが、自分が強くなる喜びが感じられた。

地獄の数々の仕掛けや、獄卒達…それらを自らの肉体で以て乗り越えていくのは、ゲームやらで“主人公達が魔王を倒すために、敵を倒して少しずつ強くなつていく様子”によく似ていた。

正直、単体で魔王瞬殺できるくらいに強くなつてしまつた氣もするが、問題ないとthoughtいた。

むしろ倒せないで欲しい。そうすれば、乗り越えるためにもっと強くなれる。

私は、自重しない。

：それはともかく、今はエンマ達三人と今後の事についての話し合いの最中だ。

どうやら私は長い時間黙りこくれていたようで、阿坊イライラ呪坊おろおろ、エンマは相変わらず無視されたことでいじけている。

「えーっと、何だっけ？」

「だから、普通地獄での刑期が終わつた人間は、一旦人間以外の生物に転生して、自然界でその邪な魂を浄化するの！」

だけどお前の場合は本来地獄に来なくてもよかつた人間だし、積極的に地獄と関わつたことで通常よりも遙かに綺麗な魂を持っているから、そのまま転生して新たな人生を歩むか、天界…所謂極楽やら天国やらへ行くかを選べるわけ！

：つたぐ、一度も説明させんなよ。」

「悪い悪い。んで…転生は記憶消されて赤子からだろ？」

「そうなるな。

まあお前の魂は元々穢れてなかつたんだが、そういう人間は、普通は冥界に来た時点でお前が通つた門の反対側へ行つて、転生するんだわ。

でもお前はそれをさらに磨いたことで、天界行きの権利を得たつてこと。あそこはお前のように、相当魂が磨かれていないと入ることを許されないから、地獄送りにされた人間が直接天界入りなんて事例は滅多にないんだぞ。

つーか初めてじゃね？」

「どうやら知らないうちに凄いことをしでかしてしまったようだ。
偉業達成って燃えるよな。

「確かに初めてじゃぞ。

天界へ送る人間は、冥界で儂が直接選んでいるから分かるんじや。

お、エンマ復活した。

「俺凄エな…まあ何にせよ天界一択だろ。

そもそも現世にいたくないからこっちへ来た俺が、記憶も体も初期化される道なんて選ぶわけがないし、天界とやらにも行つてみたいし。」

「まあセツヒ言つだらうな、とは思つたよ。」

「セツヒで」
「やれるな。

では天界へ行く方法についてでござるが、まずは一旦冥界へ戻つていただき、二つの門とは別の場所にある第三の門へと行つていただきます。

道順については、某ら三人が同行するので心配なく。

「普通は儂の部下にやらせるんじやが、龍哉のことは血ちり見送りたいからのつ。」

「はいはいありがと。いつ行くの?」

「これが本当の友情つてやつなのかな?正直まだよく分からん。

「冥界には一瞬で行けるし、今すぐどこでも出発できるだ。」

「そうか……んー、鍛練の締め括りにて、眞界までは奈落を越つて
行くわ。

着いたら連絡するから、そしたら出発しよう。」

「こやお前、登るのに何年かかるんだよ。」

「なるべく急ぐから待つとけって。」

修行中だつて100年以上会わなこととかあつたじやん。」

「まあ……いじけじな……。」

「じゃ、決定でー頑張るぞオー。」

……。

その後僕たちはしばらくの間談笑して、彼らは仕事へ、僕は奈落へ
と、それぞれの道に進んで行きました

Side ハンマ

「次……。次……。」

今日も今日とて、死んだ者達を一つの道へと振り分ける仕事をしておるハンマじや。

行き場をなくした魂で埋め尽くされ、混沌とした冥界を見て、誰もやらないなら儂がやってやる！ と思つてやり始めたはいいものの、最初の頃は本当に大変じやつた。

今のように、部下もいなかつたからのつ。

地獄の方もかなり混雑しておつたが、牛頭馬頭兄弟を見つけて獄卒の管理職にしたのは当たりじやつたな。

区画整理をしてそれぞれに担当者も据えて、冥界から小地獄へ行くまでの流れをスムーズにしてくれた。

おかげで下の混雑を気にすることなく送れるようになつたわい。ま、獄卒の人員不足はまだ解消されていないみたいじやがの。

「…にしても、龍哉が奈落を登り始めてから、今日で50年か。ちよび、上から下へ行くのにかかる年月が過ぎたことになるのう

…。「

奈落を登るなんて、儂でも骨が折れる。
進んでやううとは御わんの。」

果たしてこつまでかかるんじやうな…。

Side out

Side 龍哉

「とつかあああく…！」

遂に奈落を登つたことができた。

もんの凄く長かつたが、何とかなってよかつた。

ずーっと力を入れてなればならないから、正直途中で後悔したこともあつたが…諦める、などと直つ選択肢はなかつた。
なぜなら、カツ「悪いからだ！」

…まあ、それはともかく、Hンマのとこ行きましょか。

もちろん、以前来た時のように、『何故かエンマがいる方へ行かな
ければならぬ』ような気になってしまつ』よつなこともない。

まあ、そのエンマに用があつて、現在進行形でそちらへ向かつてい
る、俺が言つことじやあない氣もするが。

門番も「登つてくる馬鹿がいたら通してやれ」とでも言つてあつた
のか、すんなりと通してくれた。

「エンマちーす。」

「…えつ、もうっ、

さつき『まだまだかかるじやろつなあ』とか思つてたばっかりなん
じやが。

えつ、50年で登つたの？

「ほお、来た時と同じ時間かい。
こりゃあ俺も凄くなつたもんだな。」

「こや、凄すきじやる…。

まあなんにせよ、無事に着いてよかつた。お疲れ様じや。
今兄弟を呼ぶからうの。」

「あいよー。」

大人しく待つてまーす。

……。

「おーっす、早かつたなあ。
つかお前凄エなあ。」

「二人とも、おひさ
まあ1000年間頑張つて鍛えてたら、お前らもできるようになる
つて。」

「こつら鬼だし、できるようになるよね……？」

「いや無理で“じやれぬよ。肉体にも成長の限界と言つものがあるで”
ざるからな。

むしろ、人の身である龍哉殿が何故そこまで成長できるのか、不思
議でたまらないので“じやれぬが……。」

「ああ……それは俺も疑問に思つてた。
まあこんなに長く鍛えた人間の例を知らないから、もしかしたら可
能なのかもしけないけど、それでもこの強度は人体の範疇を逸脱し
てる気がするわ。」

明らかにオーバーキル氣味の攻撃やら熱やらに耐えられるんだもん
な……。

ん？……獄卒連中は、限界があるのに地獄といつ過酷な環境下でも隨
分と余裕があるようだつたな……あの耐久性は種族デフォなのか！？
ズルイ！

「でもま、強くなれるんだからいつか。」

「 わづじゅな。

そして、そろそろ出発するかの。」

「 あこよー。」

……。

……。

「 いやー、どこまで行つても暗いねー。」

ホント、真っ暗だ。

見える範囲には、もう僕達以外には誰もいない。

そして、光はないのに相手の姿は見える不思議現象。

「 もうじゅな。

だから儂らが一緒に向かつてこらんじゅよ。
迷つても田印等はないからね。」

「 死人に死は無えから、運が悪けりや永遠に彷徨つことになるや。」

「 まあそもそも、大王の許可がなければ冥界を自由に歩くことすらできない故、何ら問題はないでござるが。」

「 “ 何故かエングマのところへ向かわなければならぬような気がする ” 現象か。」

不思議現象その2だね！

「そうじやな。

儂の方に来させるために、人間の魂には暗示がかかってあるんじやよ。

門をぐぐり、現世へと戻る過程でな。

死んだらその暗示が発動し、儂と話すと解除されるわけじや。」

「なるほど、そして各門へと向かうことができるわけだね。
その短い間だけ自由に行動できるみたいだけど、前に聞いたエンマの話だと、ココに来た人間は自我がすぐには目覚めないらしいね。現世行きはともかくとして、地獄行きの人でも逆らつたりはしないってことか。

「…即、目覚めた僕は何なのよ…。」

「その通りだ。やはりお前は賢いな。

龍哉の目覚めの件についてだが、正直俺達にもよく分かんねえ。
成長限界のことも含めて、どうやら龍哉は何か特別な人間らしいな。」

「

「まあそうこうつたことができるのは、神くらいじやろ。

天界におれば、そのうち原因に会うことがあるかも知れんな。」

鬼やらなんやらより、神の方が能力的な意味で格上なのかな、やつぱり。

「ん？ 神と一緒に住むの？」

「ある意味では、な。」

向こうに着けば案内がいるから、そいつが詳しく教えてくれるだろ。

「

「ふうン…。

神つて、強いかな。」

「某らは直接的な攻撃が主で、彼らはこわゆる魔法のよつな遠距離攻撃が多いです。」

まあ強さはあまり知らぬが、どうりが強いかと言えば、彼らでござるうな。」

魔法かあ…いいな。覚えたいたな。

広域殲滅魔法とか…うへへ。

「なアに気持ち悪い顔で涎垂らしてんだよ。ほり、そろそろ着くぞ。」

いつの間にか目的地に近いところまで来ていたようだ。

前方を見ると、そこには紫色に光る、魔法陣と思しきものがあった。

「あれに乗ると自動的に天界まで転送されるようになつてある。眞界よりも上にあるから、落ちてこくとかは無理じやしの。」

「いやあ、ここに来るのが目的つてわけじゃなかつたけども、死んでから1100年間…長かつたねえ。」

「あまり一緒に居られなかつたが、龍哉殿と週1す日々は楽しかつたでござるよ。」

「やうだな町坊…つて、何今生の別れみたいな台詞吐いてんだよ。

俺達だつて天界には行けるだろ？が。」

「鬼が磨かれた魂…あるの？」

「馬鹿にすんな！

俺達の魂だつて、それはそれは美しく磨かれてるんだよ…。」

「兄者…嘘はよくないでござる。

大王も含め某らは役職上の関係で神とも会つたりしなければならぬので、定期的に天界へは行つてござるのぢやねぬよ。」

「だよな。吽坊はともかく、阿坊の魂が美しいはずないもんな…。」

「ぐつ……まあ俺達にも仕事があるからたまにしか行けねえけど、そつち行つた時はお前のところにも顔出すよ。」

「その時は儂も行くから、一声掛けてくれ。」

「承知したでござるよ。」

「よし、んじゃーそろそろ行くかな。

まあお前らは中々いい奴だ。少なくとも現世であつた人間共よりは。会えてよかつた…かな？よく分かんねえけど、ともかく世話になつたな、ありがとう。」

「某も、龍哉殿と会えてよかつたでござるよ。」

「ああ、面白い奴だしな。

それを考へると、アホなことしたエンマさんにも感謝か？」

「龍坊にも許してもうひとつなんじゃから、もうわれは言わんてくれ……」

「

「いや、たまに言つとかなこと、そのつまんないからしそうだから。

こいつが特殊なだけで、普通の人は怒るから。」

「まあまあ、魂の件での腹いせにエンマいじめさんはやめとけって。俺は怒らないどころか、むしろ感謝してんだからよ。現世行きにされたら恨んでたぜ。」

「龍哉殿は、現世では色々と辛に思いをしていたよひびきながらなあ。

天界に行けば、人間界でのイメージ通り、それなりにいい暮らしができるでござる。」

「わうか。んじゅま、期待しておくかな。

そつしたうば……えーと、魔法陣に入ればいいんだよな?」

「つむ、わうじゅ。向こうつでも元氣でな。」

「ああ、お前たちも達者で暮らせよ。」

そう言いながら、陣の内側へと足を進める。

中心辺りに来たところで、陣の輝きが一層強くなつた。体が少し浮かんでいる気がする。

「じゃあなー龍哉。」「また、でござるよ。」「またのう、龍坊。

「またな、三人とも。」

次の瞬間、目の前が光に包まれた。

あまりの眩しさに思わず目を瞑つてしまい、視力に影響はないんだろつか…などと考えてしまつた俺は悪くないと思う。

そして浮遊感が一気に強くなつた！…と思つたら、なくなつた。目を閉じていても辺りが明るければそれが分かるが、その明かりもいくらか弱まつたようだ。

着いたのか、と思い目を開けてみると…。

「眩しいぞう…。」

現世でも“晴れの日の昼間、外に出た時に感じるくらいの光”には弱かつた俺だが、地獄や冥界で過ごすうちにそれが悪化したのか…？少し遠くに街のよつなものを確認することができたが、すぐにまた目を閉じてしまった。

……。

あれからどのくらいの時が経つだらうか。

10秒、20秒…もしかしたら1分かもしれない。

そんな悠久とも思える時を過ごし、俺はよつやく顔を額へと向かって動かした。

「…」

目を開けるとそこには、一人の男がいた。

Side 龍哉

「神代龍哉さんですね？私は天界の案内を任されている、ガリードという者です。

…名前については納得しておりますので、そんな可哀相な者を見るような目をしないでください。」

「…よ、よろしく。」

転移先にいた男は、どうやらガイドさんだつたらしい。

一見すると人間の様だが、彼の背後には白い羽らしきものが見える。

…天使か？

「えー、まずはここ」の説明ですね。

もうご存知でしょうが、ここは天界と呼ばれる場所です。

神や天使、人間などが住んでおり、全ての人間は磨きあげられた魂を持つ者達です。」

「人間以外は違うのか？」

「ええ。そもそも人間以外の者達はここで生まれますので、魂がどうとかは関係がないのです。

次に居住区についてですが、種族別 人、神、天使など に分けられたエリアがありまして、基本的にはそのエリア内に住んでいただきます。

今あちらに見えているのが、人の生活しているところです。

転移しますので、残りの説明はそりそりでしましちゃうか。」「

そう言って、私の肩に天使が触れた瞬間、私たちは先程まで遠くに見えていた街の中へと移動していた

「おお！ 魔法使っちゃうなんて、さすがは天使だなー。」

私の心は初めて生で見る魔法に、少し興奮してしまつててるよつだ。

「ええ、転移魔法が得意なので、案内役になつたんですよ。
それで… まずは住む家を決めましょうか。」

空いている好きな所でいいですよ、建ちますか？」「

建つ…？

まさか… ま た 魔 法 か！

「えーと… それじゃ、地図みたいのあるかい？」

一応何があるか把握してから建てたいしな。
そう言つと、イード氏は懐から地図を出してくれた。
… ふむ、街の出入り口付近は嫌だよな。
かと言つて店が集中している中心街に近いのも煩そうだ。
中心と出入り口の間が妥当なとこか。妥当過ぎてつまんねえな。
んー… まあいいや、飽きたら建て替えよつと。

「IJの辺でー。」「

「分かりました、実際に行つてみましょ。」「

俺が候補地を告げると、またもや転移でそこへ移動した。

……。

ローマを思わせる、石畳でできた広い道路。

家がズラリと並ぶような感じではなく、一軒一軒がいくらか離れて
いる。

ひとつひとつのお敷地が広そうだ。

「……ふむ、まあいいんじやないか？」

普通なんて言葉からは程遠い私だが、たまにはいつこう中間地点に
いるのも悪くないだろ。」

「ではいい」と呟つことだ。」

そう言つて、イーデ氏は懐に手を入れる。
家を建てるのだろう。

杖か？杖とか出すのか？

魔法と言つたら杖だもんな。

得意な転移魔法は杖なしでも余裕だが、建築系等には必要なんだろ
う。

さあ、見せてくれ！魔法の力を！

「…………あ、もしもし？イーデです。
ええ、新規の方の家を……はい、はい。
……K地区の24番地付近です。

はい、お待ちしております。それでは失礼します。」

「……。」

「業者の方ですが、15分後にきてくれるやつです。
大体の間取り等決めておきましょうか。」

「……。」

「あれ、どうしたんですか？」

神代さん？

「……んで……なんでなんだッ……！」

業者だとつー？魔法じゃないのかつ！

私の心は絶望に打ちひしがれ、思わず失意体前屈をしてしまつた。

地面を17回ほどノックしたところで、私はようやく我に返った。

「はア……イーデ氏、だからあなたはイーデ氏なんだよ……。
まあいいや……間取りだつたな。

とりあえず地下室有りで。地下含めて四階建ての、各階一部屋ずつ
二十畳くらいの広さで。

トイレも各階によりしく。もちろん風呂とは別ね。

一階の一部屋は和室でお願い。玄関は靴を脱ぐタイプで。

……と、こんなもんかな。あとは気になつたらこっちで勝手に弄るか
らいいよ。」

「人の名前を悪口のように言わないでください……。
間取りの件、承知しました。

… ひとつ、どうやら業者の方が来られたようですね。
今的内容を伝えてきます。」

……。

工事が終わるまでの間、俺はイード氏と暮らすことになった。
彼は天使だが、仕事柄人間のエリアにも家を持つていたらしい。

イード氏の家に居る間に分かったことは、やっぱ魔法SUGEEE E!! ということ。

いやむしろ天界が凄かつた。

まだ人間居住区から出たことはないが、ここにいる人間はみんな、
魂が磨き上げられた人ばかり…つまり、その道の達人である（あつ
た？）人がほとんどだった。

自分もこの中の一人だと思うと、感慨深いものがあるなあ…。

そして魔法SUGEEE E!! の理由だが、なんとここには“何でも
出てくる魔法の箱”があるのだ！

すみません、“なんでも”というのは言い過ぎました。
でもあまりに大それた物でなければ、欲しい物は割と手に入ります。
食糧然り、武具然り、本然り、機械然り。

最初に出したのが煙草だったのはご愛嬌ですね…夢がなくたって
いいじやない！生きていた時に大好きだつたんですつ！！

そして例えば食糧だが、材料の段階の物だけではなく、出来上がつ
た物までも出せるようだつた。

幸い私は料理ができたし、完成品を出して自分が急げ者になるのも
嫌だったので、基本的には材料の方を出すようにした。

面倒くさがりだから、完成品出す」ともそれなりに「あるけどね…まあやらないよりはマシってことだ。

…いや、そもそも食べなくても生きていける体なんだけどね？味覚はあるんだし、やっぱり美味しいもの食べたいじゃん。

まあそんなことより、これで色々な分野での修行ができるようになつたことが嬉しかった。

いつの間にか、私は自分を鍛えることが楽しくなつていたようだ。それに気づいた時の私の感動は、計り知れないものがあつたよ。それもそのはずだよね…生まれて死んで、よつやく初めて物事に熱中できたのだから。

いやあ、現世で願つて止まなかつたことができるなんて、死んでよかつた！天界サイゴー！

そしてそして、今日は我が家の中完成日である。

どんな家になつているか楽しみだなあ…。

……。

「…お？ 来た来た。

おーっす龍哉！ 久しぶりだな！」

イード氏と共に家のあるはずの場所へ向かうと、そこには阿坊達が

いた。

「ちーす。年単位で会わない奴が、数か月で久しぶりか…？
まあいいや、どうしたんだ、今日は。」

「龍哉殿の家ができると聞いて、お祝いに来たのでござるよ。」

イード氏はエンマと知り合ってから、それからも挨拶を交わしている。

「そうか、ありがとうな。
で、肝心の家は……。」

そちらを見ると、豪邸とまでは言えないものの、それなりに大きい家があった。柵で囲まれている庭も広い。
気になるのは中だな。

「結構いい家っぽいな。中に入つてみようぜ。」

「俺の家の家を参考にしているから、靴は脱げよな。」

……。

“広い”…中に入つて最初に浮かんだ言葉は、ソレだった。
現世では一軒家だったが、場所は東京。住宅が密集しているわけである。
俺の家は一般家庭だ。八畳やら十一畳がせいぜいだった。
ここへ来てそう思うのも仕方ないだろう。

まだ家具やらが無いせいか、余計に広く感じた。

「内装の方は、『自分の好きなようにしていただき…』といつ形をとつております。例の箱もありますので、どうぞお好きなように飾り付けて下さい。」

「なるほどな。業者的人に、『いい仕事だった』と伝えておいでくれ。」

そう言えば業者は人だったのだろうか。
だとしたら、彼もまた達人級なのだろうな…。

「よし、細かいのは後にして、とりあえず机やら椅子やらを出すとするかの?」

「やうだな。そこで祝杯をあげよ。一碼も一緒に飲もうぜ。」
「ありがとうございます。」一緒にやめていただきます。」

そして俺達は、家の完成を祝いつつ、翌日まで飲み明かした。

「準備はいいな……？始めつ！」

龍哉達は今、庭に出でている。
何をしてこるのかと言つと……。

「……Aufplatzen Flamme 『爆炎』！」

神や天使の強さに興味があつた龍哉が、イードに頼んで試合をして貰つているのだ。

そして現在、数十メートル先にいる彼の呪文と共に放たれた炎が、龍哉に向かつて飛んできている。

（…あ、これ避けらんねエわ。）

炎が龍哉に触れた瞬間、凄まじい音と共に爆発した。
ちゃんと防音結界を張つているので、近所迷惑にはならない。

「…やりすぎましたかね。

死なない体なので、思い切りやつてくれと言つ」とでしたが……。

煙が晴れると、そこにいたのは無傷の龍哉だった。

「…相変わらず滅茶苦茶だな、アイツは。」

とは、阿坊の言。

「馬鹿な…。」

唚然たる面持ちのイード。

「やっぱ魔法力コイイなあ…。」

たつた今自身に放たれたソレを思い返して、幸せそうな表情の龍哉。
私も攻撃系はあまり得意ではないとは言え、普通のレベルまでは使えるのですよ?」

「ああ、確かに威力はそれなりにあつたよ。
俺の強さがそれ以上だつただけだな。」

よかつたな阿坊。地獄もまだまだ捨てたモンじゃねえぞ。」

確かに、彼を鍛えた地獄という環境が、少なくともイードの魔法を上回つたことの証ではある。

しかし…

「そつは言つけどな… それは地獄が凄いだけであつて、別に俺達が今を防げるかと言つたら、そりや無理だから。」

そつなのだ。

成長限界のある阿坊らでは、元々の耐性で威力を緩和しようとも、
決して無傷でいられるよつた威力ではなかつた。

「うーん、鍛えすぎたか？攻撃通らないと無敵に近いな……鬪いがつまらなくなつたらどうしよう。」

……とりあえず、イード氏倒して後で考えよつ。」

「……させません！次は私の持つ最大呪文です。

E·u·n K·r·e·u·n……『栄光の十……』」

イードが再び詠唱を始めたその瞬間だった。

「んー、詠唱中無防備すぎじゃね？」

龍哉は、その脚力で以て一瞬でイードへと肉迫し、その臂力で以て彼を押さえつけた

……。

結局、龍哉の出鱈目の強さを見せるだけに終わった試合も終わり、5人は再び家中へと戻つてきている。

「ハア……あの、あなた本当に人間ですか？」

「……えりやんせりしこや。」

「イード殿、それについて考えるのはよした方がいいでござるわよ。少なくとも、某らはもう諦めているでござる。」

「それが賢明なようですね…。」

「事の経緯からすると、褒めてるのか貶してるのかよく分からん会話だな。

まあそんなことより、俺は今困っているんだ。」

「お？ 龍哉が困ってるなんて珍しいな。
どうした？」

興味津々、とばかりに問いかける阿坊。

「いや、さつきの試合で思つたことなんだが、どうやら俺は耐久力的な意味で強くなりすぎてしまったらしい。

地獄で経験した火、氷、打撃、斬撃、以外の攻撃だとまだダメージを負うだろうが、俺の性格的にそれを克服するのも時間の問題だろう。

このままだと、その圧倒的な防御力に任せ、被弾なんて関係なく、ゴリ押しするスタイルになりかねん。

しかし、そんな美しくないやり方は避けたいんだ。

…どうしたもんかね？」「

もちろん他の力もかなりの高さにいるが、硬さはそれらの更に一段上だ。

わざと鍛えないでおく…というのも変な話だし、彼の言つ通り時が経つに連れて、徐々にダメージの通る攻撃が少なくなつていいくだろう。

そして一つ言つておきたいのは、"そのスタイルが美しくない"と言つのは、龍哉の主觀によるものなので、作者は如何なる抗議も受け付けないとこうことだ。

美しき「**「**」つ押しの会…なんでものがあったとしても、抗議は受け付けませんよ！」

…彼の話で思つてゐるが、あつたのか、イード氏が言葉を返した。

「あの…自分で防御力を調節できないのですか？
もちろん体そのものの硬さもありますが、ある程度“氣”も使って
防いでらつしゃるのに…。」

「…………え？」

「？…ビリしました？」

「あの、俺“氣”なんて使えないはずなんだけど。使い方知らない
し。

地獄で獄卒がそれっぽいの使つてるのを見て、羨ましがつていたく
らいなんだから。

実際、彼らの技を盗もうとしてもできなかつたぞ。」

「ああ、なるほど…確かに使つていましたよ。
と言つよつ、改めて見てみると常に体の表面に張つていますね。
これも地獄と言つ環境の所為なのでしょうか。
無意識で使つているようですし、獄卒流が使えなかつたのは、本当
に単純に使い方を知らなかつたからですね。」

「な、なんだつてーーー！」

自分でも知らないうちに使えてたのかよ！
クソックソック…」こんなことつて……最高じゃないかーー！」

衝撃の事実。

彼のテンションは最高潮のようである。

「うひせえよ龍哉。」

「うん、ごめん。煩かったね。

それでその…俺も自由に使えるようになるのか?」

「やはりあそこまで耐久力を高められるのですから、素質は十分あります。

誰かにちゃんと教われば、すぐにでも使えるようになるはずですよ。

」

「そうか…よかつた。

これで防御力の面も解決できそうだし、他にも色々パワーアップできそうだな。

教えてくれてありがとひ、イーデ氏。」

「いえ、たまたま私が気を感知できる体质だつただけですよ。誰か教わる当てはあるのですか?」

「ない…が、それでいい。

誰かに師事するなんて、俺の性に合わないからな。

適当に書物でも見ながら自己流でやってこくさ。

存在が分かつた今なら、何とかできる気がするしな。

現世で生まれてから今まで、誰かに教えを乞ひたことをしなかつた龍哉。

それはある意味褒められたものではないかも知れないし、ある意味褒めるべきものかも知れないが、ともかく結局のところ、龍哉には“自分で何とかする”以外の選択肢はなかつたのだ。

地獄でも獄卒達と闘つていたが、その際に（相手が勝手に言つたこ

とは別として）自分から助言を貰つたこともなかつた。
こうして誰にも師事することなくここまでやってこられたのは、偏
に彼の真面目によるひた向きな努力のお陰だらう。

「そうですか、分かりました。頑張つてくださいね。」

「ああ、言われなくとも、だ。」

こんな感じで、彼の天界ライフは始まりましたとさ。

A u f p l a t z e n F l a m m e 『爆炎』 敵に触れた瞬間に爆発する炎の塊を撃ち出す。当然火属性。

E i n K r e u z d e s R u h m e s 『栄光の十字架』

光る十字架を発射。光属性の中でも威力が高い方だが、対単体用。よつやく折り返し地点です。

実は第一話投稿時点で、既に最終話まで書き終わっているんですね。

二作目も10話までは書き上がっているので早く投稿したいのですが、ストックがないと不安で不安で不安で不安なんですね。

10・新たな出会い（前書き）

いつもやくみの子が出来ました。
キャラが固まつてないのぢゅうとふわふわした感じです。

Side ???

「フンフンフーン」

今田は久しぶりの休みの日と二つひとど、現在お出かけ中。目的地の湖は、もう田の前だ。

今日は何かイイコトがありそうな気がする。

「もう、リゼ様ったら、相変わらず歩くの早すぎですよ。仕事は遅いのに（ボソッ）」

お弁当を持ったユニーが、少し小走りになりながらこちらの姿が可愛くて、ついついじめたくなっちゃうんだよね。

「ちよっとユニー。今何か聞こえた気がしたんだけど。」

「え? わせ、気のせこですよー。」

まったくこの子は… 最近遠慮しなくなってきたね… ボクが神だつてこと、忘れるのかな。

…いや、あの引っ越し思案がここまで話せるよくなつたんだから、これはこれでいいことか。ま、ボク以外の人たちの前じゃ、未だにじどうもどうになつちゃうみたいだけど。

「…あー、やつと着いたあー。」

ユニーが一休みしたそ'うだし、一日休憩しますか。んーと、どこかいい場所は、つと...人がいるなんて珍しいね。何してるんだろう。

「何してるんですか?リゼ様。」

「ん、人を見つけたからちょっと話して行こうかと思つてねー。」

「あわ、知らない人ですか?緊張してきました...。」

「あはは。別についてこなくてもいいんだよ?」

ユニーはここで休んでなつて。」

「いえ、部下としてついていきます!」

わたしの見ていないところで、リゼ様が誰かに迷惑をかけないか心配ですから。」

「この子の中で、ボクの評価はどうなつてるんだろう。」

そんなに周りに迷惑はかけてないつもりなんだけどなあ...。」

「大体リゼ様は自由すぎるんです。」

この間も仕事をさぼつたりゼ様を探してみれば、他の神のエリアに勝手に入つてゐるし...。」

訂正、それなりに迷惑はかけてたね。主にこの子に。」

「あーハイハイ、以後気をつけます。」

「もつつ。その台詞も、今までに何度も聞いたことか...。」

鍛練は積んでいる。

湖の側で瞑想をしていると、見知らぬ一人の少女　いや、こんな世界だ、見た目の年齢は当てにならんか　ともかく、その一人の内の活発そうな方の子が話しかけてきた。

「鍛練…の中の瞑想。」

「ふうん。武人…つてヤツ?」

「いや、うーん…どうだろうね。一種の趣味かな。」

人間界に居た時に武道を嗜んでいたわけじゃないし、鍛えていたのは地獄でも生き抜くためと、念の為つてだけだし…。

「それにしては、一流のオーラ?みたいなのがあるよ。」

「ああ、1000年以上鍛えてるから、それはあってもおかしくないかもな。

実際、その鍛練が認められてここ（天界）にきたわけだし。」

「1000年…！わたしより凄い年上だ…。」

「へえー。そんなに続けて飽きないの?」

もう一人の大人しそうな少女が何やら言っていたのを華麗にスルーしつつ、興味津々とばかりに尋ねてくる女の子。
後ろの子が微妙に悄氣てるぞ…。

「たまに飽きるね。もともと飽き性だし。」

でも壁を乗り越えるのは楽しいし、必要なことだから続けるよ。
他にやることもないしな。

武術に限らず、趣味なんてものは大抵そうじやないか?
最初から最後までずっと飽きないなんてのは珍しいだろ。」

「それは確かにそうだね。」

「ところで、どのくらい強いの?」

「知らんがな。」

「まあ少なくとも、地獄の獄卒が全員でかかってきても、無傷で倒せるくらいの力はある。」

「こっちに来てからは試合を一度しただけだけど、その時は天使相手に簡単に勝利できたよ。」

「え、…それで少なくともって…強すぎじゃない?
あなた人間だよね?」

「それ、前にも聞かれたよ。」

「俺の1135年前の記憶が正しければ、人間だ。
ただ、どうやら成長限界がないようで、鍛えれば鍛えるだけ強くなるんだな、これが。」

「うわ…ますますあり得ないでしょ。
今度アヌ父さんに聞いてみよっと…。」

「アヌ…?変な名前だな。
外国人か或いは…神か。」

「てゆーか地獄にいたんだね。」

「それで天界に来るっていうのも、聞いたことないなあ…。」

グイグイくるなあ、この子。
まあ嫌な感じはしないけど。

「ああ、色々事情があつてな…。エンマが初めてのケースだつて言つてたよ。」

「へえー…あなたつて、なんか面白いー。ボクの真名を教えてあげる。」

「へ？…ひみ…ひみつとこ、ゼ様いいんですか？そんな簡単に真名を呼ばせて…。」

【真名】

神が神としての名とは別に、持つている名前で、神同士であつても簡単に呼ばせない。

自分でつけるか、親（のような関係の神）がつける場合がほとんど。つけない者もいる。

信頼や愛情の証として、預けることが多い。

…確かにード氏がそんなことを言つてこいたな。

「他人の判断基準にとやかく言つたくはないけど、そつちの子の言う通り、俺に呼ばせるのは早計じゃあないかね？

つーか真名があるってことは、やっぱり神だったんだな。」

「バレてたか…そう、ボクはイシュタル。真名はリーゼロッテだよ。」

…ふふつ、初めて男の人に真名を教えちゃつた

…言つちやつた。

「…言つちやつた。」

「うやら後ろの子も同じ思いを抱いたよつだ。つか初めてかよ…いいのかこんなで…。

「あー…まあ言つちやつたもんは仕方ねんな。確かに預かつたぞ、リーゼロッテ。

後ろの子はリゼつて呼んでるみたいだし、基本的にはそつ呼ぶことにするからな。

そこで俺の名前だが…神代 龍哉だ。」

「龍哉か…これからよろしくね。

あ、紹介しなきや…この子はユニー、天使だよ。」

メソポタニア神話の神がなんで天使といるんだ?

聞いた話によると、色んな神話がじつちやになつたよつな世界らし
いし、そう考えるとアリ…か?

「え、えと…ユニーって言つます。

リゼ様の補佐をしています。よろしくお願ひします、龍哉さん。」

「ああ、よろしくな。」

「それであのえつと…もつお分かりかも知れませんが、リゼ様はと
ても自由奔放な方です。

色々と迷惑をかけることもあるかと思いますが、根はとっても優し

い方ですので、あまり怒らないでくださいやいっ。」

嘔んだ。

「りやあ自由な上司に色々と苦労していそうだな…。

「くつ…正面から反論できないのが悔しいつ。」

「どうせ商業用得だろ。

まあ、俺はそういうの気にしないから大丈夫だよ。酷くなれば。
わて、それはそうと…君達、火と氷以外の属性の攻撃手段は持つて
る力ネ？」

Side out

Side 二

リゼ様と来た湖で出会つたのは、龍哉さんという男の人でした。
離れて見ていた時は、かつこいいけど、おつきくてちょっと怖いな
あ…なんて思つていまつたが、話してみるとなんだか安心するよう
な雰囲気の方でした。

それに今は天使のわたしも、元は人間だからか、少し懐かしい感じ
もします。

ともかく自由なりゼ様と違つて、常識を持つた人でよかつた…。

そう思つていた時期が、わたしにもありました。

「…君達、火と氷以外の属性の攻撃手段は持つてゐる力ネ?」

「へ? ボクは雷の魔法なら得意だけど…それがどうかしたの?」

「イヤ、それをちょっと私に向けて撃つてくれない力ナ、と思つてネ。」

突然口調が変わつたと思ったら、彼はおかしなことを言いだしたんですね。

「困つてたんダヨ、なかなか魔法を使える神仏に会つ機会がなくてネエ。」

君達に出会えてよかッタ! 今日と申す日に感謝だネ!」

「状況が違えば口説き文句だよね… てかマジなの?」

「どちら力と言つと、サドだヨ。」

ただ鍛練ノ為ニ、火や氷以外の属性も受けておきたいンだ。

「そう… いくら地獄の鬼の攻撃を防げたって、ボククラス… つまり神の攻撃の威力はハンパじゃないよ?」

「大丈夫、元々死んでいる体だから、すぐに復活できるサ… さあ、

思いっきりヤツちやつてくれヨ！

「生死云々じゃなくて、痛みの方を心配してるんだけど…。
まあいいわ、それじゃ、いくよ！」

そう言って、リゼ様は呪文を唱え始めました。

「……一筋の光となりて 彼の者を撃ち抜け ？r ger von
G o t t 『神の怒り』！」

詠唱が終わるとリゼ様の前に魔法陣が現れ、そこから龍哉さんに向かって雷が…ってちょっと、それAランクの魔法じゃないですかあ！
当然、避ける間もなく直撃。わたしは急いで彼に駆け寄ります。

「だ、大丈夫ですか！？」リゼ様、やりすぎですよ！」

「あ、あはは…大丈夫だつて、死なないんだし！」

「どうしても、痛みのショックで精神が壊れたりとかしたらどうするんですか。」

「そうだな、俺以外の人間には気軽に放つんじゃないぞ。ただの人間にこの威力はヤバい。

それより、もつと高威力の魔法はないのか？」

「そうです！龍哉さんだったから無事で済みましたがけど……無事？…何で無事なんですか！？」

「天界へ来て“気”の素質があることが分かったんでな、勉強して扱えるようにしたんだ。

今のはそれを耐久力を高めるのに使つただけ。
とは言え、生還したが無傷じゃないぞ？ホラ、ここに傷ができる
じゃないか。

やっぱり慣れない属性 + 神つてのは凄いな。気の扱いもまだまだだ
し…さ、次いこ次。」

「そんな小さな傷は、傷の内に入りません。
と言つうか、さりげなく次の魔法の催促しないでください。
リゼ様も、『今度こそ…』とか呟かないでください…。」

「…ゴー、強くなるつてのは、俺の楽しみの一つであると同時に、
必要なことでもあるんだ。
もし明日にでも神が戦争を始めたらどうする？」「くら不死とは言え、
人の身ではただじゃ済まないだろ？
全国耐久力選手権が開催されたら？
愛娘が、『強くないパパなんて嫌い。うざい。お風呂は最後に入つ
てね。』なんて言い出したら？
そんなもじしもの時の為に、最強たれ、至高たれ、だ。」

「…この人、変です！

カツ「コイイことを言つていいよう、ちょっとズレてると思つたら、
実は大幅にズれていた…という感じです。
リゼ様！『パパ…強く生きて…』…じゃないですよ…」

「さ、分かつたら危ないから少し離れてなさい。
これからリゼが、さつきよりも強い魔法を放つてくれるそ'だから
ね。」

…もつ、諦めよう。

その後、リゼ様はS+ランクの魔法まで撃ち出しましたが、結局龍哉さんは傷を負いながらも一度も死ぬことなく防ぎ切り、リゼ様の魔力が切れて終了となりました。

そのまま三人でお弁当を食べたりした後、それぞれの家へと帰りました。

その日の夜

「ユニー、今日は面白かったねー。」

「そうですね。」

「お一人が闘い(?)を始めた時はどうじょうかと思いましたが…。」

「そんなこと言つて、ユニーだつて結構楽しんでたんじゃないの? ボク以外の人の前でユニーがあんなに話せてるところなんて、初めて見たよ。」

「へ?…確かに、あまり緊張せずに話せました。」

試合中に色々話したおかげで、その後も普通に接することができたんでしょうか。」

もちろん魔法を受けることが主だったと思いますが、モジモジしているわたしを見て、気遣ってくれたのかな…だつたらいいな、なん

て。

…と呟つか、思い出したら恥ずかしくなつてきました。

「しかも初対面だつて呟つのにねえ。

…あの常識外れな強さと呟い、その雰囲気と呟い、不思議な子だつたよ。

ボクも結構長く生きてるけど、初めて会つタイプね。」

「確かにここに来る前は地獄にいたそうですね。何があつたんでしょうか…。」「

多少ズレることを除けば、とても優しくていい人でしたし、なんであんな人が地獄に…それに、偶に見せていた悲しそうな顔は一体…。

「うーん、気になるわね…。

でもまあそれは置いといて、ユニーー明日も龍哉のところに行くよー。」

「ええつー?だ、ダメですよ、仕事があるんですから。

龍哉さんのところに行きたいなら、早く終わらせて休みを作ればいいんですね!」

「ふー…少しくらい、いいじゃーん。」

「ダメです。またアヌ様にお説教されても知りませんよ。」

「うげ、それはもう勘弁…。

分かった、ちゃんとやるよ。」

「初めからそうすればいいんです。わたしも手伝いますし。」

「わたしも、行きたいですね。

そうして翌日から、以前より仕事に励むようになつたり、ゼ様が見られるようになりました。

「龍哉さんに会うためだと思うと、なんだかわたしも普段よりやる気が湧いてくる気がします。

初めて感じるこの気持ちは、一体何なのでしょうか。

「……」「ちやーん。何か微妙に乙女な空気を感じるんですけどー。」

「へ? 何ですかそれ。そんなことありませんよ。」

「うーん、怪しいなあ……。」

10・新たな出会い（後書き）

? r ger von Gott 『神の怒り』 術者の前方に魔法陣を出現させ、そこから雷を放つ。威力は前話の『栄光の十字架』と同じくらいっぽい。あ、威力の話は、同じ人が使った場合です。込める魔力量によって上下します。

真名の設定が全く役に立たないのですが、もう少し可愛い名前にしたかったので無理矢理つけました。
リゼに関しては名前も呪文もドイツ語で統一しています。
作者が忘れたり、龍哉が別言語の魔法を使わせない限りは、そのままの筈です。

Side 龍哉

ども、現在鍛練より帰宅中の龍坊です。
いやあ、やつぱり“氣”って凄いね！

先日リザの雷を浴びまくったけど、死なずに済んだもの！
正直普通に死ぬと思つていました。

意識的に使つとあんなに強化されるなんて、どうなつていいのだろう。
今度誰かに詳しく聞いてみよっかな…。

そんなことを考えつつ、家に到着した僕が扉を開けて見たものは…

「……あ、帰ってきた！おかえりタツシー。」

「お帰りなさい、龍哉さん。あ、あの……すみません。」

Side out

Side 二

龍哉さんと出会ってから数週間経ち、仕事にやる気を見せていました
ゼ様にも、とうとう限界が来たようです。

「あーもう一回、いい加減龍哉に会って行こう。」

「…そうですね。リゼ様がサボらないおかげで、近頃は仕事も渉っていますし…大丈夫です。」

わたしもいつも以上に頑張りました。

今まで休みがなかなかとれなかつたのは、単純に仕事が溜まりすぎ
ていた所為なんです。

普通にやれば、普通に休めます。

これからもリゼ様には頑張つていただきたいものですね。

「せうと決まれば、早速行きましょー！」

……。

……。

仕事を切り上げたわたしたちは、イードさんに龍哉さんの家の場所
を聞いてやつて來たのですが…。

「あやー…いなーとは想定外。そつぱんば、いつこるのかとか聞い
てなかつたね…。」

「どうしましよう。このままここで待ちますか?」

それともどこかで時間を潰してしばらくしたらまた来るが、日を改めるかですが…。」

「うーん、日を改めるってのはイヤだなあ……おや?・ヨー殿、鍵が開いておるやよ?」

「えええ?ダメですよ、勝手に入っちゃ!」

「多分大丈夫。龍哉もこの前、余程の事をしないなら許してくれるって言つてたし。」

「家に許可なく入るのは、十分に“余程の事”だと思うのですが…。」

「

その後、結局リゼ様の押しに負けて、彼の家に入ってしまいました。そうして、色々物色しようとするとリゼ様を窘めつつ龍哉さんを待つていると、玄関の扉が開く音がしました。

「……あ、帰つてきた!おかえりタツツー。」

「お帰りなさい、龍哉さん。あ、あの……すみません。」

途端に扉の方へと飛んでいき、龍哉さんに声をかけるリゼ様。私も後に続きます。

「…あるえー?何で一人がいるのかなあ。この場所教えた覚えはないんだけど…ハツ!」

もしかして、実は夢遊病を患っていた僕が偶然一人と遭遇して家を教えたとか…?」

「…え違こますから…。」

相変わらず斜め上を攻めてきます…そこがまた楽しかったりするんですけどね。

ところで、今のは冗談…だったのですよね?

「イードに聞いたんだよ。」めんね、勝手に入つて。でもこの部屋以外には行つてないから。」

「ふうん…構わないよ。最初に言つたけど、少なくとも君達なら大抵の事は既に許しているから。鍛練で家を空けていることも多いし、使つてくれる人がいるところの家も喜ぶんじやないかな。」

「そつ?…ありがと。ならこれからもちょくちょく来ようかな。ね、ユニ?」

「リゼ様、いくら許されたからと言つて、勝手に入るのはやつぱり抵抗が…。」

先ほどの言葉は、社交辞令のような気持ちで言つてゐる可能性もありますからね。

でも、この方はそういう理由で、自分の本当の気持ちでないことを言つ人ではないようにも感じますが。

「僕は本当に構わないよ。具体的に言つと、今の平和な時をぶち壊すべきらしいの敵対行動を取らないなら、まず怒らないはず。」

まあ、それくらいしても怒らない可能性も否定できないけど。

龍哉さんは少し自嘲気味に笑いながら、そんな言葉を付け足しました。

た。

何と云つたか… やつぱり龍哉さんのお話で、[冗談以外は全て真実のよ
うな空氣]があります。

でもそつだとしたら、なぜ[冗談]で許容できるのでしょうか。

「…ボクが云つのもなんだけど、ボク達が会つのは今日が一回目だ
よ。何でそこまで許してくれるの？」

普通そこまでされたら… と云つたが、現時点でも怒つても不思議じゃな
い氣もするんだけど。」

リゼ様も同じことを感じていたようだ。

「まあそこいら辺はHONMAにでも聞いてよ。あいつなら答えてられるだ
らうし、水晶もあるから分かりやすい。それよりさあ、『ご飯でも食べようじえ。神や天使は食べないとダメ
な体だつて、イーデ氏も云つてたし。』

水晶とは過去を見る事のできるアレでしみつか… と云つたが、
過去に何かあつた…？

リゼ様もまだ気になつてこないのですが、これは次の休みにもHON
MA様を訪ねることになつそうですね。急に訪ねるのも失礼ですし、帰つたら早めに連絡しておかなくては
いけませんね…。

「わざと… 何食べる？」

わたしが思考に耽つてこる間に、龍哉さんは既に食事の準備をして
いました。

「箱」も用意してあるようです。

「んーボクは何でも……やっぱ龍哉と同じの食べる。」

「わ、わたしも同じ物をいただきます。」

リゼ様もいつの間にか食卓に坐っていたようで、わたしも椅子に座りつつ答えました。

リゼ様は龍哉さんのことを、本当に氣に入っているみたいですね……わたしも似たようなものですね。」

「あー……神や天使だから食えないみたいな物とかあるの?」

「ないよー。ちなみに他の神や悪魔も一緒に。」

「ふーん。じゃあ今日は扇風機でも食べようかね。」

なるほど、扇風機ですか……ん?。

「……扇風機!?」

「龍哉、そんな物食べるの!?」

「ククク……あり得ない、冗談だ。」

「ふと思いついたから言つてみただけよん。」

「何の脈絡もなくそういうことを言わないでください。紛らわしいです……。」

「悪いが生前からの癖みたいなものでな、今更直せんよ。」

「もしかして、突然口調が変わるのも……?」

「そうだ。いつの間にやら染みついてしまった。

…それは…と、メシだ。

普通に作る…かと思つたんだが、お前らと話しているのも楽しいから、今日は箱から直接出させてもらつた。
どうせ味は大して変わらんからいいだろ。」

そう言つて、箱から料理を出す龍哉さん。

これは…たらこスパゲッティですね、大好きです…さすが龍哉さん、
分かつてます！

「ありがとう。」

「ありがとうござります。」

「あいよ。いただきます。」

「「「」」

「「「」」

…つん、やつぱり美味しいです。

Side out

「…そう言えば龍哉、勝手に入ったボクが言つのもなんだけど、鍵を

開けつ放しだと不用心じゃない?」

「んー…例の箱もあるし、基本的にここでは盗みを働く意味がないからなあ。

盗るとしたらその人が独自に作り上げたものとかだけど、今のところ我が家にはそれもない。

そもそも、ここにいる人間はみんな善人と言つか、悪いことをしない人のはずだし。

だから、少なくとも今の我が家は鍵をかける必要がないんだよね。ま、もしどっから邪神がきたら盗られるけど。」

「ふーん…どうしても普通は掛けと悪いんだけど…。」

「だつてほら、あれだよ…面倒。」

ズコッ…という音が似合いそうな体勢で崩れるリゼ。龍哉のものぐさな性格が、ここで出でてしまったようだ…。

その後は三人で談笑し、龍哉は笑顔で一日を終えた。

龍哉の家を訪れた数日後、リゼとユニーの一人はエンマの許を訪れていた。目的はもちろん龍哉の事を聞くことだ。

彼が怒らない理由、地獄にいながら天界に来ることができた理由、二人はそれが知りたかった。

そのために他人の過去を覗くのにはためらいもあつたが、地獄から天界へ入つたという異色の経験を持つ龍哉を、神として知つておく必要があつた。

何か裏技的な方法で入つたのなら、彼の強さと相まって危険人物にもなりかねないからだ。

ただ龍哉への不信感など、出会つたその日に一人の中からは消え失せていたし、ここへ来たのも純粹に彼のことを知りたいという気持ちが大きいつよいではあるが……。

「や、エンマ！」

「」んにちは。」

「おう、来たかイシュタル。そここのユニから話は聞いてある。龍坊のことを教えて欲しいんじやつたな。」

「そうだよ。龍哉もエンマに聞いてこいつて言つてた。」

「いいだろう。水晶を取つてくるから少し待つてあれ。」

エンマが簡単に許可をしたのには訳がある。

彼は既に龍哉の過去を知つていたし、龍哉には幸せになつて欲しかつた。

しかし自分は冥界の主であり、簡単に龍哉に会いに行くことはできない。

それ故、天界に住んでいる誰かに彼の事を知つてもらい、力になつて欲しかつた。

幸いエンマは一人と知己であつたし、この一人になら任せられる

思ったのだ。

「よし、持つてきただぞ。

何を話すにせよ、まず龍坊の過去を知つておいた方が分かりやすい
じやうひ。

早速見せるから、目を閉じてくれ。」

……。

……。

「…彼はこんな人生を送つていていたのね…。
何もしてないのに、龍哉にとつて悪いことばかりが起つていくな
んて…。
ほとんど独りぼつちじやないの。」

「特に晩年は酷いものですね…。

まともだつたのは、生れてからほんの数年だけですか。」

過去を見終わった二人は、目を腫らしていた。

「そうじや。ある意味、ユニーとは真逆かも知れんのひ。」

「確かにそうかも知れませんね…。

生まれつき病弱だったわたしは、生きたくて堪りませんでしたし、
家族や周りの人もいい方ばかりでしたから…。」

「つむ。君のように生きたいのに死んでしまつのも不幸じゃが、龍坊にとつて生とは辛いだけのもの。」

死じるが唯一希望を見出せるものだったのじゃ。」

不幸にも色々な形があり、感じ方も人それぞれである。

「そんなの大したことない」と思う者がいれば、「そんなの耐えられない」と思う者もいる。

そして、龍哉にとつて自分の身に降り注ぐ、時が経つにつれ加速度的に不幸が増していく、という不幸は、耐えられないものだった。

「……どうして龍哉さんは地獄に行くことになったのですか？」
この場合だと通常はそのまま転生することになるのだと思いますが。」

「それがのつ……かくかくしかじかで彼の不幸を見抜けなかつた儂が、刑期を10倍にして送つてしまつたのじやよ……。」

若干言に辛そうに語つたエンマ。

「何よそれ？あんまりじやないの……。」

冷めた目でエンマを見る一人。

「い、いや、龍坊にはもう許してもらつたんじや。と直つより、初めからそんなこと気にもしてなかつたようじやがの……。」

むじり転生しなくて良かったと言つておつた。

「ハア……もういいわ。で、なんで龍哉は怒らないの？」

「もう既に想像がついていると思うが、それは過ごしてきた人生の中で、感情が徐々に希薄になつてしまつたせいじゃな。

喜怒哀楽の中でも特に「怒」については、それが顕著に表れておる。恐らく酷いことが起きたのが当たり前だつた龍坊は、そういうことを慣れてしまつたんじゃう。

「なるほど…悲しそうな理由ね。」

「うむ。儂も彼奴には幸せになつて欲しいと思つておる。そして彼奴のことを見つたお主には、彼を支えてやつて欲しい。頼めるかのう？」

「もちろんだよ。頼まれなくたつて、やつてやるわ。」

「わたしも頑張ります…！」

「それは良かつた。

龍坊も儂や阿坊達なんかより、綺麗な女子が傍にいる方が嬉しいじやろうて。

どうじや？友人として支えるよつ、嫁として支えるのもいいと思つのじやが。」

探るよつに提案するヒント。

「そ、それはお互いまつと知り合つてからじやないとね！ まだ初めて会つてから日も経つてないし、そういうことを決めるのは早すぎるわ。

別に龍哉の事が嫌いとかつてわけじやないけど、あつちがどう思つてるかも分からぬし。

神と人間つていう立場の問題もあるし、パパも許してくれるかどう

か…。

…といふか、ニヤニヤすんな！馬鹿エンマー。」

焦つてこらのカ若千早口で話すつづこ、吹つ飛ばされルンマ。

「わたしが龍哉さんのお嫁さん…。」

結局、満更でもなさうな一人であつた。

中身なし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2949y/>

天国と地獄と一人の男(仮)

2011年11月23日19時48分発行